



大妻女子大学 地域連携推進センター
平成 30 年度年報

第 6 号



2019 年 10 月

大妻女子大学 地域連携推進センター

目 次

地域連携推進センターの概要	1
地域連携推進センター設置の背景	1
運営基本方針	1
機能と役割	1
組織構成	2
委員会構成	2
構成員	3
施設設備	4
平成 30 年度 地域連携プロジェクト報告	5
平成 30 年度 地域連携プロジェクト概要	5
平成 30 年度 地域連携プロジェクト採択一覧	5
三番町アダプトフラワーロードの会との地域美化運動	7
障害者雇用企業との連携による T ボール大会の開催	9
親子の居場所づくりに向けた「大泉子ども食堂」プロジェクト	11
大妻囲碁フェスタ 一坂の上の街を囲碁で盛り上げる	13
誰もが子ども見守り隊プロジェクト—子どもも大人も誰かが不自由だと思ふことを 知るために、私たちの「伝える」取組み—	15
千代田&多摩地域 子供自然体験教育プロジェクト	17
どろん子大運動会と寺子屋活動	19
大学近隣店舗と学生とのコラボレーションによる「健康×ボランティア」プロジェクト	21
むささび食堂：食事で心の共生を	23
神保町の出版と書店を元気にするプロジェクト	25
能登の里海を守る：伝統漁と地域の活性化プロジェクト	27
唐木田発：学生と地域でコラボする体験型防災講座	29
地域の子どもたちが体を動かして仲間と遊べるロボット中心の遊び環境づくり支援	31
多摩における子育て家族の居住・住み替え支援プロジェクト	33
からきだ匠(たくみ)カフェ～地域がつながる場所～	35
里親・ファミリーホームの子ども支援プロジェクト	37
平成 30 年度 地域貢献プロジェクト報告	39
平成 30 年度 地域貢献プロジェクト概要	39
平成 30 年度 地域貢献プロジェクト採択一覧	39
障害者雇用を支える現場スタッフのためのゼミナールⅡ	40
ジュニアアスリートのためのスポーツ栄養セミナー	42
認知症や精神疾患を抱える人々の地域移行・地域定着を学ぶワークショップ	44
東京都少女サッカー大会(小学生)支援プロジェクト	46
「だし」で育む和食のみらい推進プロジェクト 2	48

大妻力を世羅町の第6次産業支援につなげる地域貢献活動の試み	50
大妻さくらフェスティバル2019	52
アトリウムステージプログラム	52
平成30年度地域連携プロジェクト報告会プログラム	53
俳句大賞発表	53
神輿展示	54
除伐材から作った炭でクラフト(消臭袋)作り体験	54
癒しのクラフト作り&三陸復興支援のワークショップ	54
ねりきり販売	54
業務報告	55
平成30年度の事業	55
平成30年度の予算・決算報告	59
平成30年度の会議	59
資料	60
大妻女子大学地域連携推進センター規程	60
大妻女子大学地域連携推進センター運営委員会規程	62
大妻女子大学地域連携推進センター企画実行委員会規程	64

地域連携推進センターの概要

地域連携推進センター設置の背景

平成 17 年 1 月の中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像（答申）」において、21 世紀における大学の使命は、教育と研究だけでなく、社会貢献が第三の使命とされました。大学の自己点検・評価にも含まれているように、大学が果たすべき役割の中で、学術研究や人材育成に加えて「地域連携」が重要性を増してきています。

本学でも、「大妻学院のミッションと経営指針（平成 20 年 9 月）」において「教育機関としての社会的責任を認識し地域社会との連携に努める」ことが掲げられ、学院の社会的責任として「今後地域貢献を展開させていく組織として教職員協働による地域連帯センター(仮称)による組織的支援が欠かせない」と述べられています。

平成 21 年度に開催された「地域社会との連帯に関する懇話会」では、様々な角度から本学の地域連携の在り方を検討した結果、今後一層、在学生、教員、卒業生と地域社会との連携を活性化して広報につなげると共に、それらを促進する機能として「大学の社会的責任（USR）全般に関わる情報の整理と一元化、連絡・調整、広報の一部を担うもの」として地域連携に関わる包括的センターが必要であるとまとめています。

また、これら社会貢献や社会的責任という視点に加え、学生が地域の諸活動に参加することは、主体性や積極性を養い、本学の教育理念である「関係的自立」の在り方を、実体験を通して考える機会となり、教育的観点からも地域連携の推進が重要であることは言うまでもありません。

これらを背景として、平成 25 年 4 月 1 日に地域連携推進センターが新たに設置されました。

運営基本方針

1. 大学の社会的責任として、地域連携を積極的に推進することを基本方針とする。
2. 地域連携でいうところの「地域」は、近隣地域に限らず、地理的範囲を超えた保護者、卒業生、関係機関、企業、行政など、大妻女子大学を取り巻くステークホルダー全体を含むものとする。
3. 地域連携の内容は、大妻女子大学の教育理念である「関係的自立」の考えを踏まえ、学生が様々な地域と関わる中で主体性や自立心を身に付けることができるよう、その活動に在学生が直接関わったり、その成果を在学生の教育に反映できるものについて、重点的に取り組む。

機能と役割

1. 広報機能

地域連携のテーマの下、学内における既存の活動や事業をホームページ等でタイムリーに発信するとともに、年次報告の形で、本学の地域連携の実績を外部に公表する。

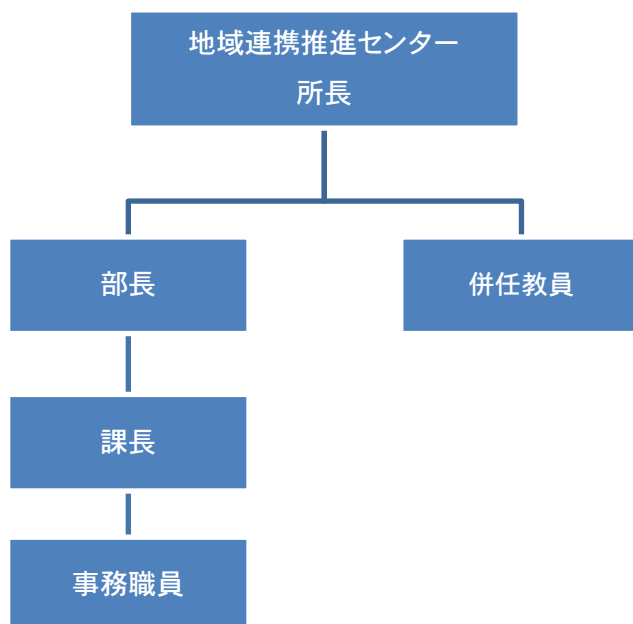
2. マッチング機能

社会のニーズ(市民、企業、行政等)と大学の持つ機能のマッチングを支援し、学外からの「地域連携」に関連した相談や紹介要請に応え、学内の資源につなげる。

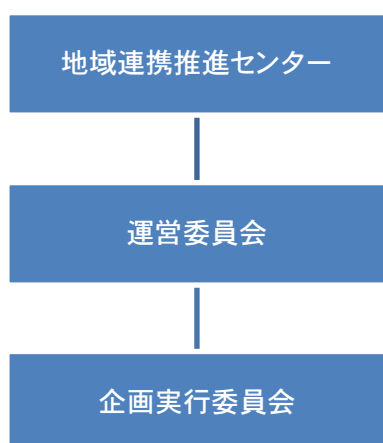
3. 企画・活動促進機能

社会貢献や社会的責任の実行のみでなく、学生が地域の諸活動に参加することで「関係的自立」の在り方を体得するという、教育機能を併せ持つ地域連携活動を企画し、活動を促進するため、「地域連携プロジェクト事業」(5 ページ参照)を、また、より地域に根ざした活動を促進するため「地域貢献プロジェクト事業」(39 ページ参照)を地域連携推進センターの下に創設し、その運営を行う。

組織構成



委員会構成



構成員

平成 30 年度 地域連携推進センター名簿

構成員	氏名	所属等
センター所長(学長が任命)	井上 美沙子	副学長
センター事務部長	村田 裕道	事務局
センター事務課長	佐々木 裕子	事務局
センター事務職員	宮澤 律江	事務局
センター事務職員	山本 志乃	事務局
併任教員(学長委嘱)	甲野 毅	家政学部
	五味渕 典嗣	文学部
	生田 茂	社会情報学部
	小川 浩	人間関係学部
	安藤 聡	比較文化学部
	堀口 美恵子	短期大学部

平成 30 年度 地域連携推進センター運営委員会名簿

構成員	氏名	所属等
センター所長	井上 美沙子	副学長
センター事務部長	村田 裕道	事務局
センター事務課長	佐々木 裕子	事務局
家政学部長	青江 誠一郎	家政学部
文学部長	村上 丘	文学部
社会情報学部長	山倉 健嗣	社会情報学部
人間関係学部長	小川 浩	人間関係学部
比較文化学部長	原 研二	比較文化学部
短期大学部長	下坂 知恵	短期大学部
人間文化研究科長	堀江 正一	人間文化研究科
事務局長	鈴木 勉	事務局

平成 30 年度 地域連携推進センター企画実行委員会名簿

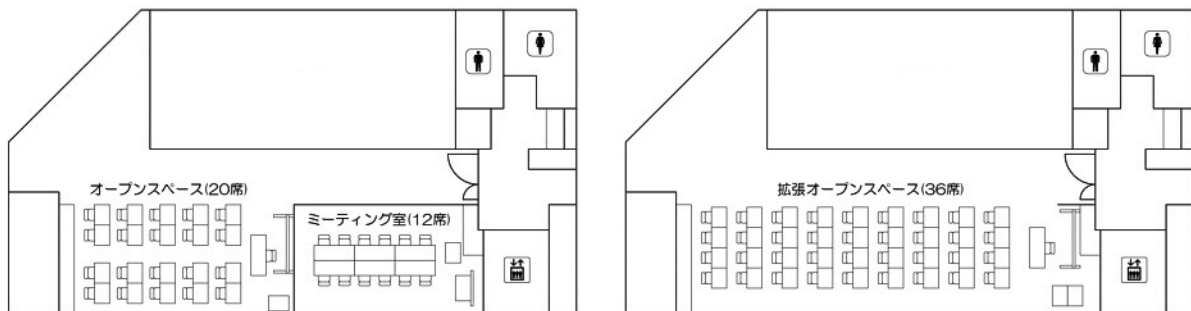
構成員	氏名	所属等
センター所長	井上 美沙子	副学長
センター事務部長	村田 裕道	事務局
センター事務課長	佐々木 裕子	事務局
センター事務職員から 1 名	山本 志乃	事務局
併任教員	甲野 毅	家政学部
	五味渕 典嗣	文学部
	生田 茂	社会情報学部
	小川 浩	人間関係学部
	安藤 聡	比較文化学部
	堀口 美恵子	短期大学部
各学部・研究科から選ばれた専任教員	阿部 栄子	家政学部
	五味渕 典嗣	文学部
	炭谷 晃男	社会情報学部
	藏野 ともみ	人間関係学部
	安藤 聡	比較文化学部
	堀口 美恵子	短期大学部
	田中 優	人間文化研究科

施設設備

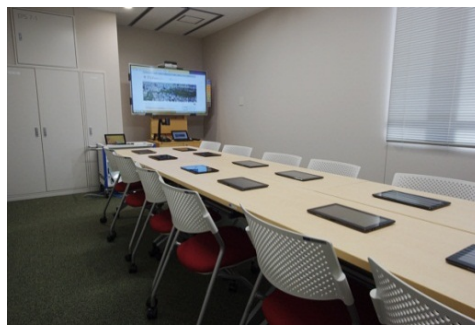
地域連携推進センター事務局は、千代田校の別館7階にあります。

別館7階にはミーティング室、オープンスペースもあります。ミーティング室の間仕切りは可動式となっていて、間仕切りを移動して収納すると、1つの大きなオープンスペースになります。

ミーティング室とオープンスペースには、文部科学省の平成25年度「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」によって導入されたICT機器が設置され、学生、教職員、地域の方々による地域連携活動、情報発信の場として活用されます。収容人数はミーティング室が12名、オープンスペースが20名で、ミーティング室の間仕切りを収納して大きなオープンスペースにすると36名になります。



オープンスペース



ミーティング室

導入されたICT機器は、タブレットパソコン40台、電子黒板、プロジェクター、教材提示装置、講義支援システムなどで、パソコンはすべて無線LANでつながっています。教員のパソコン画面を電子黒板に映し出し、電子ペンで画面にマーキングをしたり、受講生のパソコン画面を電子黒板に提示して、受講生全員でディスカッションをするなど、ICT(情報通信技術)を活用したいろいろな使い方ができます。

Windows8.1仕様のタブレットパソコンは、画面を指でタッチして操作できるだけでなく、必要に応じてキーボードを接続し、通常のノートパソコンとしても使うこともできます。また無線LANとバッテリー駆動により、パソコンをコードレスで扱えるため、机の場所にとらわれることなく、20~30人の講義形式から、数人ずつのグループ学習まで幅広く対応することができるようになっています。



タブレットパソコン

平成 30 年度 地域連携プロジェクト報告

平成 30 年度 地域連携プロジェクト概要

1. 趣旨

教職員のグループ又は教職員と学生のグループによる、学生の主体性や自立心が身に付く地域連携活動の一層の推進・発展を図ることを目的に、その活動経費を補助する。

2. 対象テーマ

地域社会との連携を活性化するとともに、学生の教育に反映できる活動。分野は不問。

3. 応募資格

大妻女子大学の複数の教職員又は教職員と学生(大学院生・短大生を含む)で構成するグループ。応募するグループは、下記 3 つの要件をすべて満たしていること。

- ① 地域連携に資する内容であること (地域連携の推進)
- ② 在学生が主体的に参加する内容、もしくは成果を在学生の教育に反映できる内容であること (地域連携と教育の融合)
- ③ 個人ではなくグループによる活動であること (学内連携の推進)

4. プロジェクト支援期間

平成 30 年 5 月 10 日(木)～平成 31 年 3 月 31 日(日)

5. 支援額及び採択件数

支援額：1 プロジェクトにつき 30 万円を上限

採択数：10 件程度

平成 30 年度 地域連携プロジェクト採択一覧

プロジェクト名	代表者
三番町アダプトフラワーロードの会との地域美化活動	石井 雅幸
障害者雇用企業との連携によるTボール大会の開催	小川 浩
親子の居場所づくりに向けた「大泉こども食堂」プロジェクト	加藤 悦雄
大妻囲碁フェスター坂の上の街を囲碁で盛り上げるー	川之上 豊
誰もが子ども見守り隊プロジェクトー子どもも大人も誰かが不自由だと思うことを知るために、私たちの「伝える」取組みー	藏野 ともみ
千代田&多摩地域 子供自然体験教育プロジェクト	甲野 毅
どろん子大運動会と寺子屋活動	炭谷 晃男
大学近隣店舗と学生とのコラボレーションによる「健康×ボランティア」プロジェクト	高波 嘉一
むささび食堂：食事で心の共生を	田中 直子
神保町の出版と書店を元気にするプロジェクト	深水 浩司
能登の里海を守る：伝統漁と地域の活性化プロジェクト	細谷 夏実
唐木田発：学生と地域でコラボする体験型防災講座	堀 洋元

地域の子どもたちが体を動かして仲間と遊べるロボット中心の遊び環境づくり支援	松田 晃一
多摩における子育て家族の居住・住み替え支援プロジェクト	松本 暢子
からきだ匠(たくみ)カフェ～地域がつながる場所～	八城 薫
里親・ファミリーホームの子ども支援プロジェクト	山本 真知子

三番町アダプトフラワーロードの会との地域美化活動

石井 雅幸 教授
(家政学部 児童学科)

1 はじめに

本取り組みは、2007年から、三番町町会、九段小学校、(株)プランナーワールド、大妻学院が協定を結んで取り組んでいる三番町フラワーロードの会の活動です。番町学園通りの九段小学校から大妻学院の交差点までの街路樹下のますの中に夏前と冬前に花を植えて、管理を行うことを通して、三番町の街をみんなで美しくしていきましょうという取り組みです。九段小学校の児童の皆さんが中心になって花を植え、その活動を地域の大人が支えていこうというものではじまりました。活動が進んでいく中で、九段小学校の校舎改築で、児童の皆さんが元九段中学校敷地に移転をしました。その間は、大妻女子大学の児童学科が管理を肩代わりしてきました。

昨年の九月に無事に九段小学校の新校舎も完成して、児童の皆さんが三番町に戻ってきました。そこで、再び九段小学校を中心とした活動が再会しました。もちろん、大妻女子大学も引き続き本活動を支える立場を継続していきます。

この数年の間に、花を植える範囲も広がり、大妻学院の交差点からさらに東に大妻中高方面まで、北も二七通りまで、南も坂を登り切った大妻中高の南側まで延長してきています。また、協力してくださる地域の団体の皆さんも増えてきています。いまではアイ・ポート麹町さん、(株)アイネスさん、大妻中高の園芸部の皆さんが加わって活動を行っています。

2 平成30年度の活動内容

活動した日時に従って活動内容を紹介いたします。

○5月8日(火) 本学にて「三番町アダプトフラワーロードの会計画委員会(春夏)」を実施。

○6月1日(金) 14時から街路樹の脇から出ている枝等の撤去作業を行う。

○6月2日(土) 13時から花を植えるための準備(フラワーロードの対象の街路樹下の土の耕し、堆肥を加える作業の実施(地域の方々と学生・教員))。

○6月16日(土) 9時30分から三番町フラワーロードの会(春夏)の実施(地域の方や企業の方と学生で花を植える)。

○6月17日(日)～10月下旬 花の管理の実施(1週間に1回ないしは2回の割で散水、終わった花の摘み取りや雑草抜きなど、地域環境美化活動を地域の方々と学生・教員が継続的に行う)。

○10月16日(火)18時から、九段小学校にて「三番町フラワーロードの会計画委員会(秋冬)」を実施(三番町フラワーロードの会参加者)。

○11月3日(土)9時30分から秋冬の花を植える準備(6月2日と同様に実施)。

○11月6日(火)9時30分頃、三番町アダプトフラワーローの会(秋冬)の実施(6月16日と同様に)。なお、この会から九段小学校児童が中心で行って行く。

○フラワーロードの会の看板を全箇所立てる(前年度立てきれなかった箇所を立てる)

○11月15日(木) 6日に植えて、不足した分の花を購入して九段小学校に届ける。

○11月以降3月まで、1週間から10日に一回の割で散水をしたり、ゴミを拾ったり、草取りを行ったりしてきました。

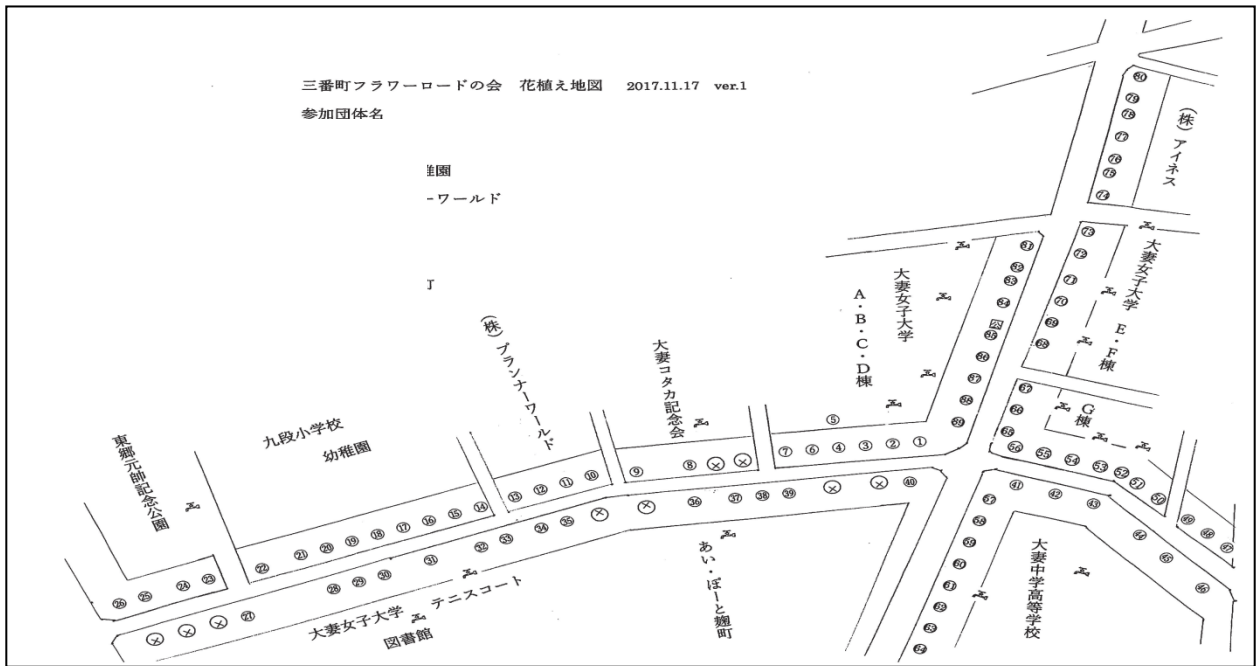


図1 三番町フラワーロード花を植えている範囲

3 現在の取り組み

本活動に参加している学生は、本学児童学科の1年全員です。学生は、1年の卒業必修科目であります児童学基礎体験演習の授業として参加しています。授業時間を超えて行わなければならない科目でもあり、ちょっと面倒な科目となっています。令和元年度からは児童学科児童教育専攻の1年のみの科目となり、参加する学生の数が昨年度の半分となりました。早速、今年度の1年も活動を開始しています。引き続きどうかよろしくお願いいたします。



写真1 6月に実施した花を植える活動



写真2 11月に実施した花を植える活動(九段小学校の児童も参加しました。)

学生たちは、地域の皆さんや九段小学校の児童の皆さんと活動できることを楽しみにしています。昨年度参加してくれた学生の一人は「手入れをしていると声をかけてくださる地域の方もいらして、うれしくなっていました」と言っておりました。地域の中にある大学を感じた時だったようです。

障害者雇用企業との連携による T ボール大会の開催

小川 浩 教授

(人間関係学部 人間福祉学科)

昨年は国の省庁等における障害者雇用の水増し問題で、障害者雇用が注目を集めました。その際に多く報道されたように、「障害者雇用促進法」の下、民間企業には 2.2%の法定雇用率が課せられ、従業員規模の大きな企業は知的障害者や精神障害者を含む多数の障害者を雇用しています。大妻女子大学人間関係学部が位置する多摩地域には、大企業が障害者雇用を目的として設立した特例子会社が多く存在しています。特例子会社とは、障害者にとって働きやすい職場環境を実現し、障害者雇用を円滑に行うために設置されるもので、障害のある人に合った仕事を集め、バリアフリーなどの物理的環境を整え、専門の指導員等を配置するなどの様々な配慮が提供されることが特徴です。

本プロジェクトの「障害者雇用企業との連携による T ボール大会の開催」は、多摩地域の特例子会社から成る多摩地域障害者雇用企業 T ボール交流大会実行委員会と人間関係学部人間福祉学科の小川ゼミを中心とした有志が連携し、企業で働く障害のある人の T ボール大会を大妻多摩キャンパスで開催するものです。大会運営に学生がボランティアとして関わることで、特例子会社で働く障害のある人と福祉を学ぶ学生の交流機会を設け、特例子会社と大学、障害のある人と学生、双方にとってウィンウィンの関係を目指すものです。



28 チームが参加した開会式



参加した学生ボランティア

今年度は平成 30 年 4 月 29 日(日)、大妻女子大学多摩キャンパスの上と下のグラウンドにおいて 19 社 28 チーム、選手と応援を合わせて 900 人以上が参加し盛大に開催されました。学生は人間福祉学科で障害者福祉を学ぶ小川ゼミの 3・4 年生を中心に、人間福祉学科の専門科目である「障害者支援と障害者自立支援制度」での呼びかけに応えた 2 年生も加わり、約 30 人が参加しました。学生の役割としては、会場準備、会場案内、お弁当の配布など運営面のサポートを行うと共に、試合が始まると各チームに入り、チームの一員としてプレーしたり、応援を盛り上げたりするなど、各チームにすっかり溶け込んでいる様子が見られました。参加した学生からは、「最初は緊張したが、すぐに溶け込めて選手の皆さんと仲良くなることができた」、「特例子会社は授業で言葉を聞いていたが、実際の様

子を聞くことができ、見学にも誘って頂いた」、「選手の皆さんがとても上手で、どこに障害があるのか分からなかった」など、様々な感想が寄せられました。

また、こうした経験を基に、今年度は10月21日(日)に大妻学院110周年事業の一環として、学生を中心とする実行委員会の主催で「110周年記念大妻杯Tボール大会」を開催しました。地域連携プロジェクトで積み重ねた経験を活かし、通常は多摩地域障害者雇用企業連絡会の方々を中心となって運営されてきたTボール大会を、大妻女子大学主催、学生中心で企画運営を行おうというものです。4月29日に開催された前述の多摩地域障害者雇用企業Tボール交流大会よりも小規模ですが、7チームに参加して頂き、大妻女子大学学生チーム1チームも加えて、合計8チームの大会となりました。学生実行委員会を中心となって、企画、事前の説明会の開催、パンフレットの作成、トロフィーの手配、当日の運営などを主体的に行いました。また、多摩地域障害者雇用企業連絡会の世話人の方々には、黒子役となって頂き、常に温かく学生をサポートして頂きました。



運営と共にチームとしても参加した学生たち



Tボールを楽しむ学生

当日は、多摩キャンパスの学園祭2日目。人間関係学部単独での学園祭のため賑わいが減るのではないかと心配されたところ

ですが、グラウンドに大勢の方々に来て頂いたことで盛り上がり、また、Tボール大会に参加された方々にも学園祭を楽しんで頂くことができました。大会の運営には、NPO法人東京Tボール連盟、NPO法人日本Tボール協会にもご協力を賜り、審判の派遣の他、読売巨人軍のV9戦士、黒江透修選手がTボール教室を開催して下さり、注目を集めました。昼休みに行われた障害のある人たちによる勇壮な和太鼓演奏も、大会を大いに盛り上げてくれました。この大きな行事を自分たちで企画、運営したことは、学生にとって貴重な社会的経験になったと思われまます。最後に、ご協力を頂きました多摩障害者雇用企業連絡会、NPO法人東京Tボール連盟、NPO法人日本Tボール協会の皆様に、改めて御礼を申し上げます。



開会式での学生実行委員長挨拶



学生と参加チームとの試合

親子の居場所づくりに向けた「大泉こども食堂」プロジェクト

加藤 悦雄 准教授
(家政学部 児童学科)

1. 活動内容

本プロジェクトは3年目であり、児童学科林明子講師と協力して実施している。学生が主体となり、子どもの貧困対策や地域の居場所づくりの一環として全国的に行われている「こども食堂」の実践に取り組んできた。①子どもや保護者一人ひとりの気持ち、例えば「ご飯を食べて一息つきたい」「好きな遊びをしたい」「話を聴いてほしい」「勉強を見てほしい」などに丁寧に向き合い、子ども主体のつながりや居場所づくりに取り組むこと、②将来、教職や福祉職を目指す学生が地域における子ども支援・保護者支援の方法や大切さを経験的に学ぶことが本プロジェクトの目的である。

1回の定員は20名程度とし、料金は子ども無料、大人200円である。また、地区児童館職員や主任児童委員などを介して、気になる子どもに直接声をかけるなどの働きかけも行った。学生は10:30に現地集合し、環境づくりや調理など準備を開始する。食事を提供できる時間帯は12:00～14:00の2時間であるが、学生は早めに来た子どもとの関わりも進めていく。16:00頃を目安に活動を終了し、子どもたちを見送った後、その日のふり返しを行う。

2. 活動結果

2018年度にこども食堂を計10回開催することができた(表1参照)。登録した学生の担い手は10名であり、参加者数は子ども延べ118名、保護者延べ34名、学生スタッフ延べ42名であった。地域の主な連携先として、北大泉児童館、大泉町地区民生・児童委員、大泉北小学童クラブ、練馬総合福祉事務所自立促進支援係、練馬区区民協働交流センター、練馬区青少年育成大泉北地区委員会、和光市総合福祉会館、和光市子育て世代地域包括支援センターである。また、地域の白石農園(大妻女子大児童学科卒業生)、および元文部科学大臣からお米や野菜の寄付をいただいた。調理ボランティアとして赤沢さんにご協力いただいた。

次に、広報に関わる活動として、①地域連携推進センター授与式・地域団体との交流会における活動事例報告(2018年6月16日：大妻女子大学)、②日本家政学会第3回家政学夏季セミナー(子どもの貧困とこども食堂)における招待活動報告(2018年9月6日：東京家政大学)、さらに報告に対する依頼論文として、③「子ども食堂が拓く新たな生活支援の形—子どもを主体としたつながり」『日本家政学会誌 Vol.70No.2』(2019年)を発表した。この他に、社会情報学部学生の卒業論文「子ども食堂の機能について」における調査活動に協力した。

表1. 活動日・参加者数・メニュー

活動日	参加者数	メニュー	学生数
2018年4月28日(土)	子ども8名、保護者2名	オムライス、ロールキャベツ、フルーツポンチ	4名
2018年6月23日(土)	子ども10名、保護者3名、	手打ちうどん、魚介ときのこの炊き込みご飯、ポテトサラダ、果物	3名
2018年7月28日(土)	子ども5名、保護者2名	手作り餃子、肉じゃが、ご飯、豚汁、果物	0名 ※台風

2018年9月1日(土)	子ども11名、保護者4名	豚肉のしょうが焼き、マカロニサラダ、肉じゃが、ご飯、味噌汁	7名
2018年10月20日(土)	子ども8名、保護者1名	親子丼、おでんの盛り合わせ、味噌汁、果物	4名
2018年11月23日(金) 祝日	子ども22名、保護者7名	チキンのトマト煮、サラダ、肉じゃが、ワントンスープ、ご飯、果物	6名
2018年12月22日(土) クリスマス会	子ども16名、保護者4名、	オムライス、ビーフシチュー、サラダ、シフォンケーキとアイスクリーム	5名
2019年1月19日(土)	子ども11名、保護者2名	焼き餃子と水餃子、肉じゃが、ご飯、果物	5名
2019年2月23日(土)	子ども15名、保護者4名	ぶりとお根の照り焼き、ご飯、豚汁、温野菜サラダ	3名
2019年3月16日(土)	子ども12名、保護者5名	トマトスパゲッティ、肉団子と野菜のスープ、果物	5名

3. 参加学生によるふりかえり（抜粋）

最後に、プロジェクトに参加した学生のふりかえりの一部を紹介する。前者が子ども食堂という場についての考察、後者は子どもと向き合った経験に焦点が当てられている。

・食事とは何だろうか。これまでは栄養のため、身体を動かすためには必要で、食べると元気になるものとしか捉えていなかったが、子ども食堂に参加することで、みんなで笑いあいながら食べたり、アットホームな雰囲気の中で、バランスの良い食事をお腹一杯食べることで、安心感や幸福感を得られるということ、身体だけでなく心の中にも栄養を与えるもの、そうでなくてはいけないものが食事なんだということを強く実感することができた。また、子ども食堂という場が、子どものための居場所ではなく、親の居場所にもなっていることが印象に残った。

・小学生男児とキャッチボールをしたことが印象的だ。私はあまりキャッチボールの経験はなく、一度目はうまく投げられなかった。翌月にまた誘われ、『上手くなったねー』と10歳以上年下の小学生に言われると思わなかった。彼の母親は彼の妹(2歳)の育児で忙しいためか、ここでは『二人で遊ぼう』『二人でキャッチボールしよう』と、二人ですることにこだわった。私が他の子どものほうを見ていたら、抱きついてきた。『自分をもっと見てほしい』『甘えたい』というアピールとして受け取った。『面倒見のいいお兄ちゃん』という印象だったが、いつも我慢し、がんばってきたのだなと感じた。



生姜焼きと肉じゃが

うどん作りの様子

庭で遊ぶ子どもと学生

大妻囲碁フェスタ 一坂の上の街を囲碁で盛り上げる

川之上 豊 教授
(家政学部 児童学科)

スポーツ教育研究室では、本学地域の中で活発に行われているスポーツ関係の活動がないかを調査した中で、今回は「頭脳スポーツ」としての囲碁を取り上げることとした。取り上げた理由は、本学の地域には囲碁を推進している棋院会館(五番町)があること、また、九段小学校の囲碁大会で優勝した実績や、この地域の小学生の放課後活動として囲碁が盛んにおこなわれていること。さらに千代田区内では毎年囲碁大会が開催され、囲碁が盛んな地域であることなどから、囲碁を通しての地域交流を図ることを目的とした。

囲碁については、2010年のアジア大会の競技種目としても取り上げられており、年齢・性別・国籍・障がいの有無を問わず楽しめるゲームとして東南アジア地域を中心に世界中で普及している。なお、本プロジェクトは、千代田区と(公財)日本棋院に後援を、九段商店街振興組合には協賛を頂き、日本棋院子ども囲碁サロン支部に協力を得て開催した。

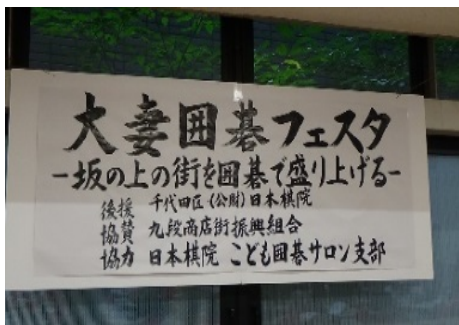


写真1：看板（書道部作）



写真2：入門講座の様子



写真3：大人の対局風景



写真4：子どもの対局風景

囲碁フェスタの開催状況については、日時と場所：平成30年11月4日(日曜日)10時～16時、大学校舎地下1階アトリウム、参加者：50名(囲碁大会24名、入門教室26名、(子ども16名と大人34名))、講師：(公財)日本棋院 原 幸子棋士(入門講座)と一宮 正人氏 普及事業部部長(囲碁大会)の協力を得て実施した。囲碁入門教室は原棋士の熱心な指導もあって、参加者からは「とてもわかりやすく楽しかった」「実際に対局しながら不明な点をスタッフの方々に教えてもらったのが良かったです」等の感想も多く好評であった。囲碁大会では、有段者が9名、級取得者15名参加者されたが、やや人数が少なかったが「じっくりと囲碁ができた」「直接対局するのは初めてであったので楽しめた」や、「今後も続けてほしい」等の意見もあり概ね好評であった。なお、2勝した方には九段商店街振興組合から商品が授与された。

課題としては、本学関係者の参加が少なかったため、次回は参加を促したいと考える。

誰もが子どもを見守り隊プロジェクト

—子どもも大人も誰かが不自由だと思ふことを知るために、

私たちの「伝える」取組み—

藏野 ともみ 教授

(人間関係学部 人間福祉学科)

1 はじめに

平成 25 年度に厚生労働省から「次代を担う大学生に児童虐待防止啓発活動を実施して欲しい」との要請を受け、学生と共に本プロジェクトを立ち上げ、毎年先輩から後輩に引き継ぎながら 6 年間活動を継続をしてきた。

プロジェクト立ち上げ当初から、児童虐待防止啓発に留まらず、積極的な「子育て支援」を目指し、大学生として何ができるのかを考え続けている。その思いを形にするために「誰もがスマイル宣言」「誰が子ども見守り隊」を柱に、毎年新たなテーマを加えて取り組んでいる。

平成 30 年度は、「相手に合わせた伝える工夫」をテーマに掲げ、これまでの活動を引き継ぎ、人間関係学部人間福祉学科の藏野ゼミ、精神保健福祉士コースの 3・4 年生 25 名が取り組みを行った。

2 プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、次代を担う大学生をはじめ、支援の対象や見守られる立場になることが多い障害者や高齢者も、児童虐待の実態を知り、誰もが自分に出来る子育て支援があることを伝える活動を行う。さらに、今年度は次の 2 つの「伝える活動」を行った。(1)子育てをする上で不自由な状況は、それ以外の人にとっても不自由につながるがあると伝える。(2)自分とは異なった不自由を感じている人もいることをお互いに知っていただくための体験企画を実施し、体験を通じて伝える。



様々な人たちに対して、伝えることや体験して頂く企画を実施しました。

3 活動内容

主な活動としては、(1)児童虐待の勉強会、(2)医療機関や子育て支援機関の専門職・機関の児童虐待対応の実態について知る機会を設ける、(3)多機関と連携した児童虐待防止啓発活動の実施、(4)多様な人にとって不自由なこと等、地域社会に共生する様々な状況におかれた人々について知って頂くパネル展示と体験企画・実施の 4 つの柱で行った。

(1) 児童虐待の実態を学び、子育てを支援する多様な機関を知る機会を設ける

子育て支援や、児童虐待通報・児童虐待児保護の現状を自分たちで調べ、報告し、ディスカッションを行った。また、病気や障害を抱える子どもと親の会と交流会をしたり、病気を抱えながら子育てをしている人とお話をする機会等を得た。

(2) 医療機関や子育て支援機関の専門職の児童虐待対応の実態について知る機会を設ける

虐待を発見し、通報する立場の救急病院の医療ソーシャルワーカーや、地域で子育て支援をしている機関の職員から、通報事例等交えたお話を伺い、専門職が担う役割について知る機会を得た。

(3) 多機関と連携した児童虐待防止啓発活動の実施

オリジナルマスコット「まさるくん」を使ったリーフレットを作成し、千代田区と協働して東京駅八重洲口で来場者や通行人に配付する活動を行った。また、中学校と高校、障害を抱える方々を訪問し、児童虐待の実態を話す機会を設けた。



千代田区や企業と協働し東京駅での啓発活動に参加しました。

(4) 地域社会における多様な人にとって不自由なことを知って頂く展示と体験企画・実施

学内では、大学祭で、児童虐待の実態をまとめた掲示やメッセージツリーの呼びかけだけでなく、多様な人々の世界を知って貰う体験を企画し実施した。例えば、電車とホームの隙間と段差、さらに砂利道を作り、ベビーカーや車椅子を押しながらそれらを越える体験をしてもらった。また白内障や色覚障害と同じ状況で、塗り絵をする体験を備えた。また、街中にある標識をクイズ形式で展示した。さらに幻聴体験コーナー等を設けた。

4 活動の成果及び今後の課題

本活動の成果として、次の3点を上げることができた。(1)虐待された子どもを保護する機関の実態や、子育て支援をする専門職の役割とジレンマについて知ることができた。(2)多様な人々の視点支や立場を知る必要性を学んだ。(3)知り得たことを人に伝える難しさを実感した。

課題としては、立場を変えれば見えるものが異なることを多様な形で実感した活動を通じて、今後も子育てをはじめ、地域の中で共生する多様な立場の人々について、自分たちで調べ、確認し、「知ること」こそ私たちが行う課題として上げられた。知って終わりとせず、自分の意見を持ち、他者に伝える努力と話しを聴く努力を続けることも課題として上げられた。

千代田&多摩地域 子供自然体験教育プロジェクト

甲野 毅 准教授

(家政学部 ライフデザイン学科)

【目的】

本プロジェクトは、環境イベントの参加、自然体験教育プログラムの企画・実施、大妻祭への参加の3つの環境教育の実践からなる。子供の成長にとって自然体験は重要な役割があるとされているが、現在の子供たちは自然と触れ合う機会が減少しており、自然との距離が開いている状態にあると言える。この問題を解決するために、私達ができることは子供達に少しでも自然との触れ合うことができる体験機会を提供することである。また、このプロジェクト

は学生が主体となって行うことから、調査、企画、実践の手法を学ぶ良い機会になると考える。そして最終的に、地方自治体と協働して実施し、大妻女子大学のキャンパスがある千代田地域、また多摩地域の自然環境に貢献することも重要な目的である。

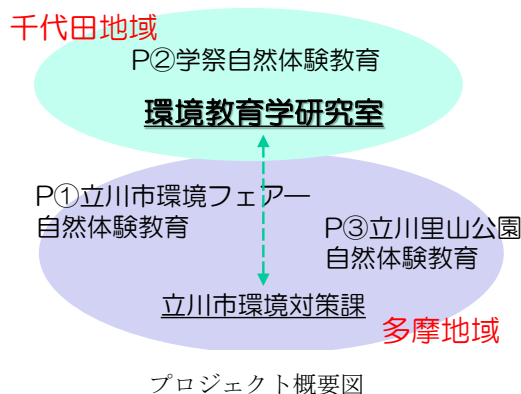
【活動内容】

環境イベントの参加では、立川市の環境イベント開催主旨に従い、環境教育学ゼミナール内で自然体験教育プログラムを企画し、実践する。与えられたイベントスペース内で行い、来場者に対してプログラムを実施し、環境の大切さを伝える。自然体験教育プログラムでは、地域のニーズに合わせたプログラムを自治体と協議しながら、学生が最初から企画、計画を行なう。そして自然豊かな都市公園において、参加者を募集して実践する。大妻祭では、来訪者に、学生が実習で訪れた妙高高原の里地・里山の現状を、五感を通して体感してもらいながら、理解してもらうために、企画、実践を行う。

千代田&多摩地域 子供自然体験教育プロジェクト全体工程

5月	立川市環境フェアの企画
6月	立川市環境フェアの企画・実施・反省
7月	立川公園視察 立川里山公園自然体験教育企画
8月	立川市環境対策課打ち合わせ
9月	妙高高原自然体験論参加 大妻祭自然体験教育企画・実施
10月	大妻祭自然体験教育反省 立川里山公園自然体験教育企画
11月	立川里山公園自然体験教育実施・反省
12月	地域連携プロジェクト振り返り

立川市環境フェア



大妻祭自然体験教育



立川里山公園自然体験教育



【結果】

立川市環境イベントでは、60名の子供達にリサイクル素材を活用した風鈴体験をしてもらった。自然体験教育プログラムでは、都市公園を5つのゾーンに分け、22名の子供達に5種類の自然体験教育を実施することができた。そして大妻祭では教室を体感スペースに演出し、50名の来訪者に里地・里山を体感するプログラムを実施した。

プロジェクトの成果の第1に、子供への自然体験教育を行うことで、開いてしまっている自然との距離を縮め、子供達の成長に良い効果を与えたと考える。例えば、子供の集中力が高くなる、また優しく思いやりを持つようになるなどの内的状態を変化させる可能性がある。また他人に優しくコミュニケーションをとることができるなど外的状態を変化させることもある。第2に、学生自身が主体となって行うことで、学生自身が調査、企画、実践力を身につけることができたであろう。そして最後にそれぞれのキャンパスのある地域において、子供達の自然体験の創出という、ささやかな形であるが社会貢献活動ができたと思われる。



大妻祭の参加者の森のための宣言寄せ書き

どろん子大運動会と寺子屋活動

炭谷 晃男 教授

(社会情報学部 情報デザイン専攻)

1 経緯

地域の子どもたち及びお年寄りの方の支援をめざすプロジェクトをこれまで取り組んだ。第1段階では、多摩市、八王子市の公民館等連携して、夏休みに「子ども新聞」を製作し、コミュニティセンターで高齢者を対象とした「携帯電話教室」を実施した。第2段階として、子どもたちの学力支援のため寺子屋を開催した。高齢者に対する活動は福島県の相馬市にある大野台仮設住宅を訪問して飯舘村の避難者の皆さんに「携帯、タブレット教室」を2年連続実施した。今年度は、第3段階として多摩キャンパス周辺の小学校で寺子屋活動を実施したり、近隣の田んぼでの「どろん子大運動会」という子どもの居場所づくりの活動を行った。

2 プロジェクト

a 推進体制

寺子屋については寺子屋推進員委員会に参加した。右表の通り、月に一度の寺子屋の開催2週間前に推進委員会があり、そこで次期寺子屋の企画及び寺子屋の案内である「まっぼっくり」を作製し、印刷をして配布いたします。そして当日を迎えることとなります。今年度は6月の教室は学校行事との調整がとれず、中止となった。他方、どろん子大運動会については、4月25日に実行委員会の核となる東京薬科大学 ASIATO、帝京大学児童文化研究会 STEP、大妻女子大学炭谷ゼミ CARBONARA の3団体の

		寺子屋開催日	開催準備委員会
4月	開校式・第1回	4/28(土)	← 4/14(土)
6月	第2回	6/2(土)	← 5/19(土)
7月	第3回	7/7(土)	← 6/23(土)
9月	第4回	9/8(土)	← 8/25(土)
10月	第5回	10/20(土)	← 10/6(土)
11月	第6回	11/23(祝)	浄瑠璃まつり
12月	第7回	12/8(土)	← 11/24(土)
1月	第8回	1/19(土)	← 1/5(土)
2月	スプリングフェスタ・開校式	2/23(土)	← 2/9(土)

顔合わせをおこなっている。5月17日、5月28日と3回の実行委員会を経て、6月3日の本番を迎えた。

b どろん子大運動会

6月3日(日)、京王堀之内駅から徒歩20分ほどの田んぼで田植え前の代かきとして子どもたちを集めて運動会を開催した。行った種目は、ドッチボール、竹引き、リレーの3種目である。また、隣接の田んぼでは未就学児を対象とした泥遊びコーナーも設けた。また、この事業は、東京薬科大学自然サークル ASIATO と帝京大学児童文化研究会 STEP 及び大妻女子大学炭谷ゼミ CARBONARA との合同で実施した。日頃どろん子になるという体験はなかなか出来ないもので、参加した親子には大変貴重な



体験が出来たと大好評であった。競技終了後は学生達が作った豚汁を食べてもらい、体を温めて帰宅してもらった。(写真の上段2枚)

c 寺子屋活動

多摩キャンパス周辺の八王子市立松木小学校、長池小学校で月に1回程度土曜に学校の教室や体育館を借りて子どもの活動を支援する寺子屋活動を行った。7月7日、7月8日、10月20日、11月23日、12月8日、1月19日、2月23日、3月21日の8回実施。内容としては寺子屋学習教室、料理教室(クッキー、フルーツポンチ)、ボッチャ、プログラミングカー、鳴こづくり、アニメーション、万華鏡教室等を実施した。地域連携プロジェクトの費用で、プログラミングカー、ボッチャ、万華鏡を購入することが出来た。毎回20名近い子どもたちの参加があり、大変人気であった。ただ、学生達の出来るものを行ったというもので、子どもたちの継続的な学習意欲を伸ばすまでには至らなかった。しかし、大妻の学生達がきてくれるのを楽しみして、毎回参する子どももあつた。



3 効果

①参加学生には計画、実施、振り返りというPDCA体験する貴重な社会的体験となった。②子どもたちに教えるという貴重な体験をもつことが出来た。③このプロジェクトを通じて大学での学びの意義にリアリティを持つことが出来たと考える。

謝辞 学生達にこのような地域社会で、他の団体とのコラボレーションを通じて、子どもや大人にかかる機会を与えて頂いた「大妻女子大学地域連携プロジェクト」に感謝申し上げます。

大学近隣店舗と学生とのコラボレーションによる

「健康×ボランティア」プロジェクト

高波 嘉一 教授
(家政学部 食物学科)

1. 目的

TABLE FOR TWO (TFT) は、開発途上国の飢餓と先進国の生活習慣病の問題を同時に解決するために生まれた日本発の社会貢献活動である。対象となるヘルシーメニューを1食購入した代金のうち、20円が開発途上国の子どもの学校給食1食分として寄付される一方で、ヘルシーメニューを購入した人には健康がもたらされるというWin-Winの取り組みである。今回本学食物学科の学生が中心となり、このTFTの活動を千代田キャンパス近隣の店舗とのコラボレーションにより進めることを企画した。これにより、大妻女子大学、大妻女子大学短期大学部の学生におけるTFTの認知度を高め、開発途上国への貢献をより身近なものにすると同時に、ヘルシー食材で作られた弁当を提供することで、本学学生の健康意識および健康度を高めることが可能になる。また、大妻千代田キャンパス近隣店舗とのコラボレーションにより、大妻と地域との連携、ひいては地域の活性化につなげることで、「ボランティア×健康→持続可能社会の実現」のコンセプトを体現するのが本プロジェクトの目的である。

2. 内容

本プロジェクトではヘルシーメニューとして「玄米オムライス弁当」を、大妻女子大学前の惣菜・



食品店「メゾンデリス」と共同で開発し、販売した。玄米は白米に比べ食後の血糖値上昇が緩やかで、食物繊維やビタミンなども多く含まれていることから、健康効果が期待できる。また卵は良質のたんぱく質を多く含むことから、栄養バランスの面でも優れた弁当である。

平成30年6月から、プロジェクト構成員の間で検討に入り、大学の夏季休業期間までの間に議論を重ね素案を作成した。

今回、主な販売対象が本学学生であるため、プロジェクト構成員の学生の間で「玄米オムライス弁当」

の内容、量、盛り付けなどを検討し、その結果をまとめ、メゾンデリス店主に提案した。店主には販売する側からの観点やコストなどを検討していただき、最終的な内容、量、食数、価格を決めた。玄米として、くせや臭みがなくて味や食感がよい、福岡県の糸島市産のミルキークイーンの玄米を使用した。またオムライスのソースとして、メゾンデリスで定評のある手作り無添加ナポリタンソースを使用することにした。価格は600円(580円+寄付金



20円)とし、販売日には10食限定で販売することとした。弁当は、店舗内で店主が調理・作成し、プロジェクト構成員の学生がメゾンデリスの店頭で11時～12時30分の間販売した。

なお宣伝方法としては、SNSの活用、店頭、路上でのビラ配り、店頭の装飾、口コミなどにより、積極的な宣伝を行った。

3. 結果

10月から「玄米オムライス弁当」の販売を開始することができ、10月の大妻祭の時も含め、11月末の販売終了日までの間、週2回ほどのペースで計11回弁当の販売を行うことができた。最初のうちは関係者の口コミなどで売上げが好調であったが、徐々に売上げがスローダウンし始めた。しかし、積極的なビラ配りや本学学生以外の近隣の方々への声かけなど、強力な宣伝の効果で販売数量を維持することができた。その結果、販売期間全体で104食の弁当を販売することができた。



寄付としては、1食あたり20円なので合計で2,080円と少額ではあるが、開発途上国の子どもの給食104食分相当となる金額を購入者からお預かりし、TFT本部に送ることができた。

4. 効果

TFT活動は、現在では全国の店舗、食堂、大学学食などに広まっているが、ヘルシーメニューを栄養士養成課程の学生がプロと共同で企画・開発し、販売まで行ったのは、本プロジェクトが初である。プロジェクト構成員の学生は、本プロジェクトの活動を通して、普段の授業では学ぶことができない貴重な経験や責任感を心に刻むことができたと考える。また千代田キャンパス近隣地域の店舗とのコラボレーションということで、地域活性化つなげることができたと考える。また本プロジェクトにおいてTFT活動を進めたことで、本学学生や地域の方々に対し、開発途上国への貢献と同時に自身の健康度を高めるといったTFTのコンセプトを広めることができたように思う。さらに、本プロジェクトのような「ボランティア×健康」といったコンセプトが、持続可能社会の実現に向けた1つの重要なソリューションになる可能性があることを、プロジェクト構成員の学生に理解させることができたと考える。

5. 最後に

本プロジェクトの実現にあたり、多大なるご支援を賜りました大妻女子大学地域連携センターおよび関係各位に心より深く感謝申し上げます。

むささび食堂：食事で心の共生を

田中 直子 教授
(家政学部 食物学科)

1. 本プロジェクトの背景と目的

本プロジェクトは、大妻女子大学狭山台校と入間市との地域交流から始まったものである。元々は狭山台校に通う食物学科の1年生が、年に2回青少年活動センターで行う活動だったが、狭山台校の閉校にともない、平成28年度からは正式な地域連携プロジェクトとして千代田校に通う3年生が参加している。

子どもが「食事を作る」ことと触れ合う場

核家族化、共働き世帯の増加、ひとり親世帯の増加は、子どもの食卓を変化させ、親が料理を作る姿を知らない子どもも増えている。さまざまな事情で家に居場所がなかったり、人との交流が苦手だったりする子どもたちに、地域の大人や大学生と触れ合いながら、「食事を作る」ことを身近に感じてもらうことがむささび食堂の目的である。

大学生が多世代交流の場で学ぶ

核家族化が進み、地域のつながりも薄くなる中、同世代以外の人間と接する機会は少なくなっている。大学生にとって、むささび食堂で活動する大人や地域のお年寄り、そしてむささび食堂を訪ねてくる子どもたちとの交流は、大きな財産となると考えられる。また、栄養士養成課程での学びを活かす具体的な道を知ることは、彼女たちの卒業後の長い人生に対しても重要な体験となると期待できる。

大学生と子どもたちとの交流

子どもたちにとって大学生は、大人世代より自分たちに近く、特別な存在になり得る。栄養士過程で学ぶ学生たちから直接、料理の楽しさ、マナーや知識を伝えてもらった経験は、子どもたちにとって特別な体験となると考えられる。大学生にとっては、不特定多数の子どもたちと接し、「子どもたちが喜ぶ」企画や料理がどのようなものか、子どもたちに伝えるにはどうしたら良いかなどを実際に学ぶ場となると期待される。

2. 本プロジェクトの内容

プロジェクトの構成

むささび食堂の活動は、青少年活動センターの行うむささび自習室の1つの企画である。青少年活動センターのスタッフ、地域ボランティアスタッフ、大妻女子大学食物学科の学生が協力して行った。

活動日：6/10(日)、8/18(土)、10/21(日)、11/18(日)、1/20(日)、3/23(土) の計6回

活動場所：入間市青少年活動センター

活動内容

- (1) メニューの検討、試作、決定：実施日までの間に学生で相談して行う。
- (2) 事前準備：前の日の夕方から夜に現地入りし、食材の購入および事前準備を行う。

(3) 当日の活動：扇谷調理師と相談しながら、子どもたちや地域ボランティアへの作業の説明、および調理・配膳指導を行い、皆でともに活動を行う。午前中は昼食、午後はおやつ
の準備を行う。

3. 平成 30 年度の活動報告

全 6 回の参加者数は、天気(台風など)による変動は若干あったものの、ほぼ一定しており、活動が定着したことがうかがえた。地域からの食材提供も多く、活動が地域に根付いていることもうかがえた。メニューは各回の学生に任されているので、回ごとにバラエティーに富んだものとなっている。地域からの提供食材のあれこれもメニューの多様性に一役かっている。

日にち	6月10日(日)	8月18日(土)	10月21日(日)	11月18日(日)	1月20日(日)	3月23日(土)
参加者数	62人	57人	48人	53人	59人	62人
メニュー	ハンバーグ コンソメスープ ポテトサラダ おにぎり チョコパイ	カレーピラフ ポタージュ、唐揚げ かぼちゃと卵のサラダ フルーツ白玉ポンチ	かぼちゃときのこのシチュー ミニキッシュ コールスローサラダ トースト ごまスィッククッキー	あんかけ焼きそば わかめスープ 揚げ出し餅 さつまいものはちみつバター さつまいもの胡麻味噌和え 大根の酢の物 クレープ	ウチイレ 団子 大根と鶏肉の煮物 ほうれん草とコーンのソテー ブロッコリーの香和え みかん フルーツゼリー	ちらし寿司 お吸い物 鶏つくね ほうれん草の胡麻和え ゆで卵 クッキー3種
大妻女子大学 学生スタッフ	5人	6人	2人	5人	3人	3人



4. 今後の課題

長く続けていくには

平成 30 年度は、青少年活動センターの担当者に異動があり、ボランティアスタッフにも変化があった。大妻女子大学の方でも認知度が上がって参加する学生数が増え、回ごとに学生の組み合わせも変わった。多くの人たちが関わりながら変わらず続けていくことの難しさも感じた 1 年だった。

むささび食堂の活動は、子どもたちが喜んでくれるメニューは何かを考えて一緒に作り、その反応を見て次にまた考えるという、小さな PDCA サイクルの積み重ねである。集まる子どもたちが変わったり、人数が変わったり、地域から提供される食材が変わったり、一緒に活動するボランティアスタッフのメンバーが変わったり、そのような状況に柔軟に対応する力を学んでいく。そんな中で、変わらずあるのは、やはり「子どもたちの喜ぶ顔」と「食を通じた心の交流」なのかなと感じた 1 年でもあった。

神保町の出版と書店を元気にするプロジェクト

深水 浩司 常勤特任講師
(教職総合支援センター)

本プロジェクトは、「神田神保町」の出版や書店との連携を深めるために、学生さんたちには神保町を知ってもらい、神保町の方々には大妻学院を知っていただくことを本年度の目標として計画されたプロジェクトである。神田古書店連盟様や老舗古書店である八木書店様、千代田区立千代田図書館様、公益社団法人日本図書館協会資料保存委員会委員長の協力を得て、多摩校「図書館サークル OLIVE」のメンバーと共に、以下の3つのイベントを計画・実施した。

1 千代田区立千代田図書館「としょかんのこしょてん」展示（千代田区千代田図書館と神田古書店連盟、大妻学院とのコラボレーション展示）

「女子教育を支え続ける大妻学院の宝物」と題して、大学図書館と博物館の所蔵・収蔵品を借用し展示した。展示品は、大妻コタカによる『模範裁縫教科書』や、『ごもくめし』と『教えの道をひとすじに』の外国語版、学院収集の貴重書、瓶細工の実物などである（展示品リストは、http://jimbou.info/news/toshokosho_10.html#99を参照）。期間等は以下のとおりである。

期間：2018年10月9日(火)～10月27日(土)

場所：千代田図書館9階、『としょかんのこしょてん』展示ガラスケース(8台)

図書館来館者数：1899名(1日平均数)

実際に展示を見た人数は不明だが、展示ケース脇に置いてあるパンフレット(神保町公式ガイド)の補充は通常展示時の倍以上あり、かつ、直接コンシェルジュが依頼されて案内した人数は45名だったと、図書館から報告があった。

同展示は、「としょかんのこしょてん」第99回として実施されたが、好評だったため、第100回の記念展示「図書館から始まる"ぶらり旅" まるごと神保町」前期展示(2019年1月28日(月)～3月23日(土))、後期展示(2019年3月25日(月)～5月25日(土))に、プロジェクトの報告等を依頼され、後期展示にB1サイズパネル9枚と展示ガラスケース8台を使った展示を行うことになった。ガラスケースには、「女子大生は古本市でどんな本を購入するか」と題した特別企画展示も提案し実施されている(2019年4月23日現在)。

2018年10月9日の展示からスタートした本プロジェクトイベントだが、当初の目的としては、千



代田図書館から学園祭への誘い(大妻千代田キャンパス)、そして、講演会への申込みも目論んでいたが、十分な効果は得られなかった。より周的な準備をして、イベントの連携、地域との連携を図ることが重要であることを痛感した。

2 「古書を知り、古書を楽しむ 書物と神保町の歴史を学ぶ」

同講演会は、千代田区神保町の八木書店会長(八木壮一氏)によるもので、以下の通り開催された。

日時：2018年10月26日(金) 14:00～16:30

場所：千代田校 人間生活文化研究所 セミナールーム

参加人数：26名

第一部では古書や古書の歴史について、写経・写本・自筆本、版本、印刷本などのスライドを用いて説明があった。その後、古書店や古書流通の特徴を詳しく解説頂いた。第二部は、神保町の歴史や神保町に居住、あるいは関係した人々の紹介や研究について講演された。江戸期本屋の状況や神保町の発祥、武家地の処分後の学校設立など、現在の研究も含めて時系列での紹介の後、文豪達との関係も明らかにされた。最後に、神保町の状況を、古書店や出版社、教育機関との関係から論じ、将来の神保町について、看板建築現代版構想も含めて提案があった。



参加者は、本学院教員(12名)、イベントのポスターや告知を見て参加した学外者(12名)、そして、本学学生と院生(2名)。より多くの本学学生の参加者を望んだが、学園祭準備日ということもあり、少人数の参加にとどまったことは残念である。

3 「初心者でもできる本の修復」(神田古本まつり併催イベント 神田古書店連盟協力)

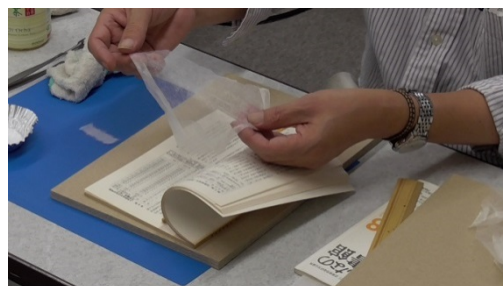
公益社団法人日本図書館協会 資料保存委員会委員長の眞野節雄氏にメイン講師を依頼し、代表者である深水や学生の協力のもとで開催された。

日時：2018年10月27日(日)13:00～17:00

場所：日本教育会館 810 会議室

参加人数：15名(15名定員)

前半は本や冊子体の構造、素材、基本的な修復方法などを学び、後半は実際に和紙や自然糊(でんぷん糊)を用いた、本や環境にも優しい修復法を学んだ。実習に用いた雑誌類は、神田古書店連盟様より提供を受け、それらをわざと破ったうえで修復を学ぶ方法をとった。事前に、修復したい本などを持ち込むことも可としたが、持ち込んだ資料を修復する余裕はなかった。修復に使用する道具は、日本図書館協会から無料で借受け、返却に必要な郵送費のみ当方の負担としたことで、経費を節約することもできた。ただし、当初は予定していなかった通信運搬費が発生したため、実施計画変更願を提出し、文房具等(消耗品費)の一部を通信運搬費(その他)に変更し対応した。



イベントの告知は、ネット上の「BOOK TOWN JIMBOU」(<http://jimbou.info/>)と、連動する Twitter、神田古本まつりパンフレットで実施した。会場やサポートの体制から、15名限定のイベントとしたが、実際にはそれ以上の申込者があり、一部お断りする状況でもあった。

参加者の感想は、「今までセロファンテープで補修していたことが誤りだったことを始めて知った」、「思ったより簡単に修理ができた」、「もう少し難しい修復も体験したい」、「本に負担をかけないことが修復に至らない一番の良策だと知った」など、イベントに参加できたことを喜ぶ感想が多かった。会場が、古本まつり会場の一番端にあったことで、古本まつりとの連携が十分にとれなかったことや、イベントから千代田校学園祭への動線を十分に確保・案内できなかったことなどが反省材料である。

能登の里海を守る：伝統漁と地域の活性化プロジェクト

細谷 夏実 教授

(社会情報学部 環境情報学専攻)

1. はじめに

日本では、昔から海の恩恵を受けて生活を営んできている。近年、海の資源を大切に、環境保全を意識しながら、持続可能な海との関わり方を考えていくことの重要性がますます注目されてきている。今では貴重となった地域に残る里海の暮らしぶりを知り、地域の人々と連携し、里海を守るためにできることを共に考えていく環境作りが急がれているのである。

私たちのゼミでは、これまで世界農業遺産でもある能登の里海保全に関する活動を行ってきた。学生たちと共に石川県・穴水町との交流活動を行い、地方自治体や地域の里山里海保全に関わる人々と連携しながら活動体制を整えてきた。

本プロジェクトでは、能登の伝統漁である「ボラ待ち 櫓漁」を題材に、里海の大切さを多くの人たちに知ってもらい、活用に向けた理解を広げるため、情報交換と発信の場づくりをめざすことを目的として活動を行った。

2. 活動内容

具体的な活動として、2つのイベントを開催した。

1) 公開講座「能登の里海スクール」(2018年10月6日)

能登の里海について、まずは多くの人に知ってもらい、興味を持ってもらうことを目的とし、「能登の里海スクール」と名付けた公開講座を、10月に本学社会情報学部棟で開催した。

オープニングでは、穴水町産業振興課の樋爪友一課長から、世界農業遺産やボラ待ち櫓漁を含めた穴水町の里海・里山について、紹介をしていただいた。

続く第1部では、『食をめぐる幸せ旅』してみませんか?』と題して、トラベルライターの朝比奈千鶴さんにお話をいただいた。進行役は細谷ゼミ卒業生で穴水町の地域おこし協力隊の経験もある、企画・地域力プロデューサーの齋藤雅代さんをお願いした。お話は朝比奈さんと齋藤さんの対談形式で進められ、現地取材に基づく能登の暮らし、「まいもん」(美味しいもの)などの紹介があった。里山を守ることが海を守ることにつながるという「山と海の循環」への言及もあった。

さらに第2部では、ボラ待ち櫓漁を復活させた穴水町里海里山推進協議会の会長・岩田正樹さん、山瀬孝さんをゲスト

に迎え、夏のゼミ合宿で実際に能登に行きボラ待ち櫓を見学したゼミ生たちと、漁の存続、里海保全



公開講座のチラシ



岩田さん(左から2人目)、山瀬さん(左)と学生たちとの公開トークの様子

などについて、公開トーク(意見交換会)を行った。

当日は学外からも、地域連携に取り組む大学教員の方、能登の地域に興味を持つ一般の方、移住を検討している方、など、約 20 名の熱心な来場者があった。そうした来場者の方からもいろいろな意見、質問をいただくことができた。全体として 2 時間の時間があったという間に過ぎ、アンケートでは、もっと時間があるとよかったという意見が多かった。

2) 大妻祭出展(2018年10月27日28日)

細谷ゼミでは、3年前から大学の文化祭に「能登展」を出展し、能登でのゼミ活動の様子や現地の紹介を行うと共に、地元の物産販売などを行っている。今年は、ゼミ合宿の際に学生が穴水産の樺の葉から樺茶をつくる体験をし、つくった樺茶をパック詰めして販売する試みなどを行った。この「能登展」の会場内に、今回「ボラ待ち櫓漁」を紹介するコーナーを設け、山瀬さんにもいらしていただいて、櫓漁の魅力や課題などを来場者に説明した。来場者からは「櫓に登ってみたい」「ボラを実際に食べてみたい」といった感想が寄せられた。

3) その他

上記の2つのイベント開催の他に、穴水町で行われた「雪中ジャンボかきまつり」に初めて大妻ブースを出展した。「雪中ジャンボかきまつり」は毎年冬に行われている町のイベントで、石川県だけでなく他県から含めて4~5万人の来場者がある。今回出展した大妻ブースで、ボラ待ち櫓漁の紹介ポスターを掲示し、来場者に櫓漁を知ってもらう機会とした。

3. まとめ

今回開催したイベントを通して、ボラ待ち櫓漁や能登の地域のことを紹介し、興味を持ってもらう機会を提供することができたと考えている。

実際に、2つのイベントで行ったアンケートでは、「伝統漁法を知れてよかった」「ボラを食べてみたい」「(穴水町に)具体的なイメージを持つことができた」「ボラ待ち櫓に乗りたい」などといった感想が寄せられていた。

今後も里海保全や地域の活性化に向けて、地域の方たち、学生たちと力を合わせて、今回行ったようなイベント開催を含めたいろいろな取り組みを行っていきたいと考えている。



「能登展」での物産販売の様子



「能登展」でのボラ待ち櫓の紹介コーナー



「雪中ジャンボかきまつり」での大妻ブース



ブース内でのボラ待ち櫓漁の紹介

唐木田発：学生と地域でコラボする体験型防災講座

堀 洋元 准教授

(人間関係学部 人間関係学科)

本プロジェクトは、ゼミ学生が行う出前防災講座として行われ、平成 28 年度からの継続で 3 年目であった。

初年度は「女子大学生の視点を活かした出前防災講座」というプロジェクトテーマで多摩市総合福祉センター、多摩市社会福祉協議会と連携して活動した。その成果は、平成 29 年 2 月に多摩市総合福祉センターで開催された福祉大会において「女子大生による出前防災講座～大妻女子大学のゼミ生が独自の視点から考えた体験型の防災講座！」として行われた。2 年目にあたる昨年度は「学生の視点と地域のニーズを活かした出前防災講座」として多摩市総合福祉センター、多摩市社会福祉協議会と連携し、地域住民への事前アンケート調査をふまえて実施した。その成果は、平成 29 年 10 月に福祉フェスタ 2017(多摩市総合福祉センターで開催)において「今日からできる 5 つの防災対策」として行われた。そして 3 年目の今年度は「唐木田発：学生と地域でコラボする体験型防災講座」として、多摩市社会福祉協議会、ほっとネットしょうぶ(唐木田・中沢・山王下等地区地域福祉推進委員会)の有志と連携して活動した。その成果は、平成 30 年 10 月に大妻多摩祭(大妻女子大学多摩キャンパスで開催)の展示企画のひとつとして、体験型防災講座を行った。

継続して本プロジェクト活動を行った結果、2 つの成果が得られた。ひとつはプロジェクト活動が地域福祉活動を行う地域住民にも認知され、唐木田地区でのより緊密な地域連携を行う土台が築かれつつあることである。もうひとつは学生たちが防災への取り組みを個人の知識や体験だけでなく、卒業研究や就職活動などのライフキャリアを考える際にも活かしていることである。

本プロジェクトは、プロジェクト構成員のゼミ学生が中心となって地域住民と協働して防災講座やイベントを実施することで、地域の活性化や地域防災力向上の架け橋となることを目的とし、「防災」をキーワードにさまざまな取り組みを行うことで、主体的に学び実践する力や、ゼミ学生および地域の方々にとって個々人の専門知識や体験を有効に活用する場を醸成することを目指した。

今年度は、これまでの出前防災講座で実施した中で好評だった「食」に関するアイデアを活かして体験型防災講座を実施した。大学や各家庭で備蓄されている非常食を飽きずにおいしく食べる工夫や期限前に有効活用する取り組みを来場者に展示・実食してもらい、自助の大切さや日常備蓄のアイデアを提案するためである。また、災害時の限られた状況下でも活かせる工夫を実演・展示することで、日常生活の中にも彩りを与えられるような「防災と言わない防災」を本プロジェクトとして提案を試みた。上記の企画を実施する前に、学生に対してさまざまな災害対応や食に関する体験学習を行い、自助の必要性や実用的で継続可能な防災への取り組みを考える機会を夏休み期間中に計画した。

(1) 災害対応に関する体験学習(立川防災館)

災害時の救急救命や防災対策に関する体験学習を行った。地震体験コーナーでは、大地震を疑似体験し、身の安全の回り方、地震発生直後の対処方法や家具類の転倒・落下防止措置の必要性について

学んだ。応急救護コーナーでは AED の取り扱いや胸部圧迫方法を体得した。救助救出コーナーでは震災現場を再現した空間で、要救助者の捜索から救出までの行動について体験学習を行った。これらの体験後、防災講座で展示・体験可能な内容についてミーティングを行った。

(2) 災害対応や食に関する体験学習(そなエリア東京)

そなエリア東京(東京臨海広域防災公園)にて災害対応や食に関する体験学習を行った。防災体験ゾーンでは、東京直下 72h TOUR で発災から脱出し、避難するまでの 3 日間を臨場感のある施設で体感した。津波体験コーナーでは、体験しながら津波に対する正しい知識を習得した。さらに防災学習ゾーンでは、事例に学ぶ災害の様相や地域情報コーナーで最新のデータに基づく災害の知識を習得し、自助体験などを行った。最後にアニメ「東京マグニチュード 8.0～東京直下 72h～」を視聴した。防災食の展示などを参考に、防災講座での試食アイデアについて検討した。

大妻多摩祭にて、ほっとネットしょうぶ(唐木田・中沢・山王下等地区地域福祉推進委員会)の有志と協働して防災講座やイベントを企画運営した。大学や各家庭で備蓄されている非常食を飽きずにおいしく食べる工夫や期限前に有効活用する取り組みを来場者に展示・実食してもらい、自助の大切さや日常備蓄のアイデアを提案した。具体的には、炊きあがったアルファ米をラップでおにぎり状に成型し、試食してもらった。また、夏休み期間中に行った体験学習やその後の打ち合わせで検討した防災クイズを作成し、来場者に考えてもらうことで防災を身近に考えてもらう機会とした。

〔プロジェクトの効果と今後の展望〕

学生はこのプロジェクトに主体的に参加することで、さまざまな経験を整理し、体験型防災講座としてその成果を形にすることで、プロジェクトでの学びを活かすことができたようであった。

今後は学生と地域とが協働しながら、さらに「地域との連携」が進むよう取り組んでいきたい。ただ、本プロジェクトはゼミ 3 年生を主体に実施しているため、夏休み以降の企業へのインターンシップとの調整が必要になるなど、活動体制の柔軟さも必要となりつつある。

本プロジェクト活動が多摩キャンパス周辺にお住いの方々や地域防災に熱心な団体との協働に波及して、地域住民の日常生活と防災への取り組みをリンクしていくことにつながる一助となるよう切に願っている。



写真=プロジェクト活動の様子(上段左・中央：立川防災館、上段右・下段左：そなエリア東京、下段中央・右：体験型防災講座)

地域の子どもたちが体を動かして仲間と遊べる

ロボット中心の遊び環境づくり支援

松田 晃一 教授

(社会情報学部 情報デザイン専攻)

子どもの成長環境において「遊び」は重要な役割を果たしているが、近年、少子高齢化やゲーム機の普及などにより多人数や多学年に渡る友達と遊ぶ機会が減少している。一方、社会的にはそのような人間的活動に対しロボットや人工知能などの先端技術が急速に浸透しつつある。そのような背景のもと、本プロジェクトでは、地域の児童たちが集まり多人数で身体を動かして遊べる環境をロボットで提供するため、多摩市立唐木田児童館と連携し多人数参加型のイベントを9月19日に実施した。

イベントは、ロボットを受け入れやすくすること、人手を介さずに自動的に行えることに重点を置き、ロボット(Pepper)のアプリケーションとして本学でソフトウェアの開発を行った。内容は、ロボットを人間らしく親しみやすいと感じ、普段はあまり運動しないゲーム好きの子でも全員で楽しめるような、全員参加型のクイズ大会とした。

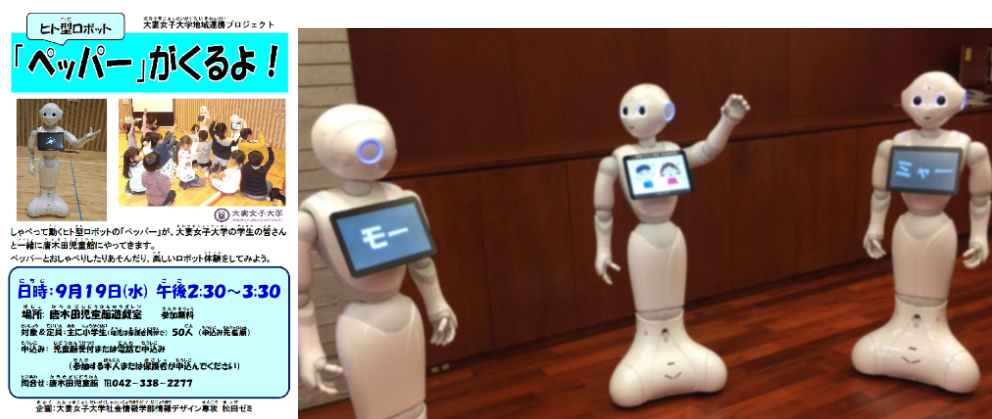


図1 児童館ポスター(左)とペッパー3台のリハーサルの様子(右)

唐木田児童館では、平成27年と平成29年にも、地域連携イベントとしてロボットを使った「ようかい体操」や1台のロボットとゼミ生による「クイズ大会」を開催し、大変好評だった。今回は内容としては前回と同じだが、3台のロボットがほぼ人手を介さずお互いに協調動作をしながら自動でクイズ大会を進行する。自動化することで誰でもイベントの開催が可能になる。イベントの流れは、リハーサルやロボットのプログラムの修正などを繰り返し、児童らにとり違和感がなくなるようにした。

今回のイベントには40名の児童が参加した。イベント当日は、最初に筆者が大学とゼミの紹介を行い、外部講師が講演を行った(図2左上)。講演内容は、ロボットが活躍している分野や、今後ロボットが児童らの生活にとって欠かせない身近な存在になっていくことを教えるものである。

その後、児童らに対してロボット3台による全員参加型クイズイベントを行った。全体の流れは、1台ロボット(マスターロボット)がクイズ問題を発話して、残りの2台のロボットがそれぞれ別の回答を発話する。マスターロボットがカウントダウンを行い、その間に児童らが、自分が正しいと思う選択肢を表示しているロボットの方に移動する(図2右上)。カウントダウンが終わるとマスターロボ

ットが正解を発話し、正解した児童には学生らが正解シールを配布した。正解発表では、正解した児童らがとても喜んでいた(図2左下)。



図2 イベント開始前、クイズ大会、質問アンケートタイムの様子

イベント後には質問とアンケートタイムを設けた(図2右下)。アンケート結果(図3)より、前年度は低学年が多めだったが今年度は高学年が増え、男女比は前年同様およそ2対1だった。(c)のクイズ正当数をみると、前回同様3~4問の正解者が多かったが今回は1問しか正解しなかった人は居なかった。また、クイズ正当率や主観的難易度は前年度と今年度で同程度とみなせることがわかった。

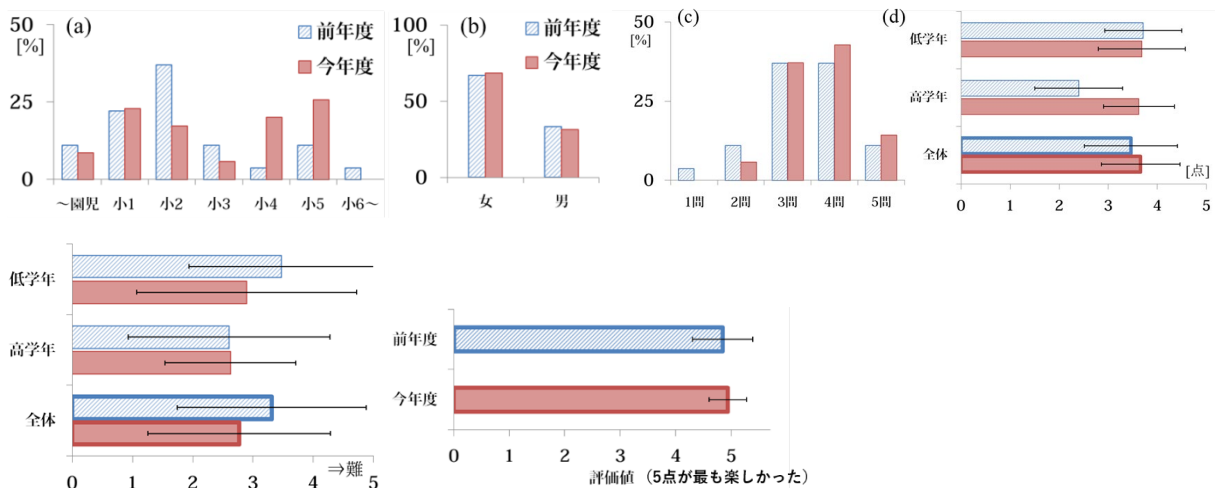


図3 児童らのアンケート結果

今回のイベントから、状況判断の部分で人間の介入が必要な箇所もあるが、人手を介さずとも複数台のロボットによるイベントの実施が可能であり、人間が中心に行ったイベントと同様に児童らが楽しめることが分かった。今回のイベントで、多学年に渡る児童らが、全員が集まって遊ぶことの楽しさを再認識し、これからの社会における人工知能やロボットといったテクノロジーにも関心を持つことを期待したい。

多摩における子育て家族の居住・住み替え支援プロジェクト

松本 暢子 教授

(社会情報学部 環境情報学専攻)

1. はじめに

多摩市はニュータウン開発から約 50 年を経過し、急激な少子高齢化に直面しています。高齢者への対応とともに、子育て世代の多摩ニュータウンへの住み替えの促進が必要となっています。そこで、本プロジェクトでは、昨年を引き続き、多摩ニュータウンの社会的資源である「子育て世代の居住地としての特性」や「良質な住宅ストックの存在」を活かして、「多摩で子育てしたくなる」魅力の発見と創造をめざして、「子育て家族」の意向調査や市民とのワークショップに参加することにしました。

平成 30 年度地域連携プロジェクトでは、子育て家族の居住ニーズで重視されている「公園」のあり方について考える多摩市公園緑地課による「多摩中央公園プレイスメイキング社会実験」を含む市民参加のワークショップに学生および教員が参画しました。これは、昨年度のワークショップの成果「子育て家族の住環境では自然環境が重視される」ことの延長です。加えて都市計画課との連携で、「子育て家族の住まい・住環境に関する調査」を市内全幼稚園の保護者を対象に実施しました。



「社会実験」ポスター

2. 多摩中央公園ワークショップへの参加と提案発表

多摩市緑地公園課による「多摩中央公園をもっと楽しく使う方法、一緒に考えませんか? ~将来にわたり楽しく使い続けられる公園を目指して~」の4回のワークショップに参加し、従来の公園の使い方を見直し、市民に求められる公共空間としての公園(改修方針)について、市民に加わり検討しました。学生の意見は、若年層および女性の意見として取り上げられたほか、意見交換の円滑化にも寄与したと参加者から評価されました。

昨年同様、永山フェスティバル(10月23日)では、子どもを対象とした「お家をつくろう!」を開催し、多くの家族連れの方々にお集まりいただき、ワー



多摩中央公園の社会実験で実施したアイデア(48のアイデア)

クショップを運営しました。4回のワークショップでは、会場設営や班での意見交換に参加し、「社会実験」ではワークショップでのアイデアを1日限定で実施し、第3回ではその評価を行いました。その後、第4回では、これらの経験を経て、学生による提案(四季を感じられる公園、大階段の改修、プレイパークの提案等)の発表を行いました。

第1回 10月14日 多摩中央公園の「魅力」「問題点」「使い方にアイデア」を出し合う。

第2回 11月4日 「社会実験」パークライフショー(ポスター参照)

第3回 11月11日 社会実験の振り返りの会

第4回 12月2日 多摩中央公園改修への意見書まとめ

その後、「多摩中央公園改修」への意見書がとりまとめられ、学生の提案も掲載されました。その後、「多摩中央公園改修基本方針」(<http://www.city.tama.lg.jp/0000008393.html>)としてまとめられました。来年度は、公園の市民参加による維持管理ルールづくりに取り組むことも決まりました。

3. 「子育て家族の住まいと住環境に関する調査」

昨年度の全保育園園児保護者を対象とし調査に引き続き、全幼稚園園児の保護者を対象として、子育て家族の住まい等の現状についてのアンケート調査を実施しました。

(<http://www.chiiki.otsuma.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2018/06/2cb33ddb793beaf2aa6f3f6f3eb3f358.pdf>)

調査時期：平成30年11月1日～15日

調査方法：質問紙調査

保育園・子ども園を通して調査票の配布、回収を行った。

調査対象：多摩市内の幼稚園および子ども園

全9園(子ども園1園を含む)に通う園児(在園児2213名)の保護者に対し、世帯単位(兄弟姉妹のいる場合1世帯とする)で配布した。

回収状況：配布数2213票、回収数1158票 無効25票(有効回収数1133票)

有効回収率 51.2%

調査回答者の95.6%が女性で、多くが専業主婦でした。3～5人家族が94.9%、「夫婦と子」の家族構成が92.3%でした。回答では「専業主婦」が59.2%でしたが、そのなかには「パートタイム」や「育児休暇中」「在宅ワーク」「休職中」などの回答がみられました。住宅は持ち家率76.4%で、住戸面積は平均89.62㎡、45.6%が3LDKでした。「公園」「緑」に関する意識が高く、満足度も高いことがわかりました。こうした結果は、昨年同様、多摩市及び本学地域連携センターのホームページ上で結果を公表する予定です。また、この調査結果を昨年度の結果と合わせて詳細に分析を行うことで、子育て家族の居住・住み替えの現状と課題を提示できればと考えています。

4. おわりに

地域連携プロジェクトとして、多摩市(緑地公園課)による市民参加のワークショップに参加することで、学生にとって多くの経験を積むことができました。とりわけ、「社会実験」は他では得られない多くのことを学んだと考えております。アンケート調査は、幼稚園・子ども園をはじめとして多くの関係の方々にご協力いただくことで実現いたしました。ここに記して、謝意を表します。

からきだ匠(たくみ)カフェ～地域がつながる場所～

八城 薫 准教授

(人間関係学部 人間関係学科)

多摩キャンパス(唐木田)周辺は病院、福祉施設、教育施設など様々な施設が存在し、身体や心に不安を抱えても安心して暮らすことのできる環境が整っています。そこで働く専門家(匠)集団が連携して吸引役となり、日頃から地域の様々な属性、世代の方々と繋がるような居場所づくりをすることで、いざという時に助け合えるような地域でありたい。そんな思いから 2017 年度 4 月、あい介護老人保健施設、社会福祉法人 楽友会、多摩市社会福祉協議会の方々との連携で活動をスタートさせ、このプロジェクト“からきだ匠カフェ～地域がつながる場所～”が生まれました。

「からきだ匠カフェ」は、毎月第 4 水曜日の 15 時から 2 時間ほど、唐木田駅前のレストラン“キッチンティス”さんのご協力をいただいてオープンしています。平成 30 年度は、主に臨床心理学専攻の大学院生が主要メンバーとして参加し、活躍してくれました。また昨年末には、2018 多摩市事例発表会にて我々の活動を「多職種・多世代でのコミュニティカフェ運営とその効果」として発表し、会場賞をいただきました。

お子様からお年寄りまで、様々な方々が一緒に楽しむ場所・空間として、また「共生社会」の実現を目指す本学学生の実践の場として、これからも楽しく活動を続けていきたいと思っています。



キッチンティスの場所と

2018 年度活動メンバー集合写真

平成 30 年度の活動内容

<番外企画>人間関係総論 II「多摩にコミットする」で新入生に唐木田を紹介

第 1 回 4 月 25 日(水) 新しいつながりを作ろう！～唐木田周辺の情報交換～

第 2 回 5 月 23 日(水) ココロを遊ばせてつながろう！～粘土細工で脳と心へ働きかける～

第 3 回 6 月 27 日(水) 自分の中の匠を見つけよう！～「旅のことば」ゲームで自己発見～



- 第4回 7月26日(水) 夏休みちびっこ企画①～チャレンジ・ザ・大道芸～
- 第5回 8月23日(水) 夏休みちびっこ企画②～ちびっこ夏フェス～
- 第6回 9月26日(水) 認知症を知ろう！

～天本病院看護師 曾谷真由美さんによる認知症セミナー～



<番外企画> 10月20・21日(土・日)多摩祭出展

～ヨガ体験レッスン、描画で自己発見、匠の技の実演&販売(タティングレースなど)～

- 第7回 10月24日(水)マインドフルネスレッスン～呼吸と気づきで心のリラクゼーション～
- 第8回 11月28日(水)女子大生に今時を学ぼう～匠カフェのインスタ映え写真を撮ろう～



<番外企画> 12月11日(火)2018 多摩市事例発表会にて活動発表

- 第9回 12月19日(水)クリスマス会～みんなで歌いましょう～
- 第10回 1月23日(水)新年会～匠カフェのテーマソングを作ろう！～
- 第11回 2月27日(水)うたごえカフェ～楽しく歌いましょう～
- 第12回 3月27日(水)認知症フォローアップ研修会

※上記の企画実施のために、毎月1回程度で企画会議を行っています。

平成30年度の特筆すべき活動成果記録

1. 匠カフェ案内チラシの裏面に活動報告記事を載せるようにしました。
2. 2018 多摩市事例発表会にて活動発表し学会賞を受賞しました
3. 匠カフェソングが完成しました。



♪テーマソング

「からきだ匠カフェ～笑顔の咲くところ～」

からきだの道に 百本シダレ
桜咲くこの街に はじまる物語
からきだ通りに 咲くハナミズキ
唐木田のこの店に 集まる屋下がり
歳のせいだとか 病気のせいとか
そんなことは忘れて 笑顔咲くところ
からきだ匠カフェ だれもが匠だね
笑顔と歌で 広がって
世代を超えて 僕らをつなげる 架け橋さ

里親・ファミリーホームの子ども支援プロジェクト

山本 真知子 専任講師
(人間関係学部 人間福祉学科)

1 プロジェクトの目的

親の疾患、虐待等により実の両親の元で生活できない子どもたちを家庭に引き取って養育する制度を里親(東京都では養育家庭)と呼ぶ。日本では乳児院や児童養護施設など施設での養育が中心となっているが、現在、国は里親やファミリーホームを増やす目標を掲げている。そのため、近年、日本では里親やファミリーホームが増加している。子どもとの関係が中途養育である里親の養育にはさまざまな課題があり、一人ひとりの子どもや里親が共に生活をするためには支援が必要とされている。以前よりも里親に関する支援は増えているが、里親やファミリーホームに委託されている子どもへの支援はまだ十分ではない。

本プロジェクトは、NPO 法人東京養育家庭の会のみどり支部と連携し、里親(養育家庭)やファミリーホームの子どもたちが他の家庭の子どもや学生とのつながりを持つことができる「子どもスペシャル」やみどり支部の里親家庭の「全体活動」において子ども支援を行う。子どもの年齢別に遊びや自立に向けた話し合い等のプログラムを行い、他の里親家庭の子どもとの関係を作り、相互交流を深める。学生にとっては社会的養護の理解、子どもの理解、児童相談所や児童福祉施設とのつながりを持つ学習機会を得ることを目的とする。

2 準備と交流

2018年度は、5月下旬に「子どもスペシャル」の企画と話し合いを行った。参加者は申請代表者・みどり支部・児童相談所の担当者が集まった。また、6月には、東京養育家庭の会みどり支部が中心となって、「子どもスペシャル」の子ども募集を行い、7月に募集の締め切り、子どもの学年・名前等の把握と学生のマッチングをみどり支部と協力して行った。9月の全体活動の募集に関しては8月に行い、子どもの学年・名前等が把握してから学生とのマッチングを行った。

3 活動内容

「子どもスペシャル」は7月21日に八王子市の高尾の森わくわくビレッジにおいて行われた。テスト期間だったため学生の参加は少なかったが、大妻女子大学人間福祉学科の山本ゼミ4年生2名が参加した。子どもスペシャル当日は、委託されている子どもの中でも幼児・小学生の保育を中心に活動した。非常に暑い日だったが、子どもたちの健康に配慮しながら実施することができた。

中・高校生はファシリテーターとともに、里親家庭の元委託児童(OG/OB)の話を聞く会、自立に向けた話し合いを行った。里親家庭から自立することで何に困ったのか、里親家庭にいる間に何をしていたかなどの先輩の話を聞き、その後グループに分かれて今の学校生活の様子などを話し、横の繋がりを持つ機会を作った。



これから子どもスペシャルが始まります！



中高校生の会

「子どもスペシャル」の参加者は、みどり支部の里親、里子、里親家庭の元委託児童(OG/OB)、児童相談所職員、児童養護施設の里親支援専門相談員、里親支援機関職員、ファシリテーター、山本ゼミ4年生2名の総勢約50名となった。

「全体活動」は9月8日にはみどり支部の全体活動を町田市大地沢青少年センターで行われた。前日から3年生8名が大地沢青少年センターに宿泊し準備を行った。当日は山本ゼミ4年生、卒業生、子ども、里親、支援機関や児童相談所の職員が参加した。山本ゼミ3・4年生18名と卒業生8名が参加し、幼児・小学生の保育に加え、中・高校生の焼きそば作りのサポートをした。

中・高校生が参加者全員の昼食を作る活動を行い、昼食後は大自然の中で自由遊びをした。川遊びやアスレチック、ボール遊び、バドミントン、卓球、お絵かき、バルーンアート等、学生と子どもたちと遊ぶ姿が見られた。里親は児童相談所主催の里親サロンを行い里親の交流を行った。

参加者は、みどり支部の里親、里子、里親家庭の元委託児童(OG/OB)、児童相談所職員、児童養護施設の里親支援専門相談員、里親支援機関職員、山本ゼミ3・4年生、山本ゼミOG 総勢約100名となった。



自然いっぱいの中の外遊び



学生と卒業生のミーティング



卓球台や体育館での室内遊び

4 プロジェクトの成果

本プロジェクトを行うことによって、子どもたちは他の里親家庭との横のつながりができ、18歳で自立をする際に他の家庭の子どもの姿や体験談から学ぶことができる。里親家庭にいる子どもたちは、普段は学校も異なり、住んでいる地域も離れているため交流することは難しい。そのため、子ども同士が集まり横のつながりを持ち、子どもの支援の機会があることは非常に大切なことである。また、学生にとっては実際に里親家庭の子どもと接することで、それまでの机上だけの学びのイメージを変えることができ、児童相談所や児童養護施設等の社会福祉専門職との出会いからも大きな影響を受ける。里親家庭の子どもへの支援を行うにあたり支援者がその背景を学んでいることもとても大切なことである。

この活動の前後に社会福祉士の実習や就職活動などを行っている学生にとっては、子どもたちとの関わりを自分の言葉で具体的に話をする機会となった。今年度は卒業生の参加もあり、学生時代に戻って子どもたちと遊ぶ姿が見られた。また、在学生と卒業生の交流も行うことができ、非常に内容の濃い活動となった。

今後も里親や児童相談所等の関係機関と連携を持ち、子どもたちの意見を取り入れ、継続して活動していきたいと考えている。

平成 30 年度 地域貢献プロジェクト報告

平成 30 年度 地域貢献プロジェクト概要

1. 趣旨

広く地域のみなさまへ本学の教育と研究成果を還元し、みなさまの多様な学習ニーズに応えるとともに、地域社会の教育、学術、文化の発展に貢献する活動の推進を図ることを目的に、その活動経費を補助する。

2. 対象テーマ

本学の教育と研究成果を地域社会に還元し、地域社会の教育、学術、文化の発展に貢献する活動。

3. 応募資格

大妻女子大学の教職員(個人又はグループ)又は教職員と学生(大学院生・短大生を含む)で構成するグループ。

応募するグループは、下記 4 つの要件をすべて満たしていること。

- ①本学の教育と研究成果を地域社会に還元する活動
- ②地域社会の教育、学術、文化の発展に貢献する活動
- ③千代田、多摩、中野、嵐山等で行われる、本学院校地の近隣住民等を対象とした活動
- ④在学生が主体的に参加する活動又は成果を在学生の教育に反映できる活動

4. プロジェクト支援期間

平成 30 年 5 月 10 日(木)～平成 31 年 3 月 31 日(日)

5. 支援額及び採択件数

支援額：1 プロジェクトにつき 30 万円を上限

採択数：数件程度

平成 30 年度 地域貢献プロジェクト採択一覧

プロジェクト名	代表者
子どもの創造性を育てるものづくりワークショップ	大西 一也
障害者雇用を支える現場スタッフのためのゼミナールⅡ	小川 浩
ジュニアアスリートのためのスポーツ栄養セミナー	久保 忠行
認知症や精神疾患を抱える人々の地域移行・地域定着を学ぶワークショップ	藏野 ともみ
東京都少女サッカー大会(小学生)支援プロジェクト	高田 馨里
「だし」で育む和食のみらい推進プロジェクト 2	富永 暁子
大妻力を世羅町の第 6 次産業支援につなげる地域貢献活動の試み	堀口 美恵子

障害者雇用を支える現場スタッフのためのゼミナールⅡ

小川 浩 教授

(人間関係学部 人間福祉学科)

平成 30 年度 大妻女子大学地域貢献プロジェクトとして、「障害者雇用を支える現場スタッフのためのゼミナールⅡ」を千代田キャンパスで開催した。昨年度、多摩キャンパスで開催した内容が好評であり、次年度の継続開催及び千代田キャンパスでの開催希望が多く寄せられたため、本年度、内容を大幅に変更することなく千代田キャンパスで開催することとした。

1. 開催状況

第 1 回 「自閉症スペクトラムの特性を理解する」

内 容：自閉症スペクトラムの特性が職場でどのような問題として表れるか、またその対応方法についての講義。

日 時：平成 30(2018)年 10 月 16 日(火)18:00～19:30

講 師：松尾 江奈氏(社会福祉法人 横浜やまびこの里)

参加者：39 名

第 2 回 「発達障害者の雇用で知っておくべきこと」

内 容：発達障害者の認知機能障害及び職場での過剰適応をトピックスとした講義。

日 時：平成 30(2018)年 11 月 12 日(月)18:00～19:30

講 師：千田 若菜氏(医療法人社団 ながやまメンタルクリニック)

参加者：37 名

第 3 回 「精神障害者の対応と医療機関との連携」

内 容：精神障害者の特性、職場で必要なストレスマネジメント等についての講義。

日 時：平成 30(2018)年 12 月 11 日(火)18:00～19:30

講 師：森屋 直樹氏(山梨大学 学生サポートセンター アクセシビリティ・コミュニケーション支援室)

参加者：36 名

第 4 回 「面談の基本技術と本人へのフィードバック」

内 容：障害者雇用場面で増えている「問題の発生」⇒「面談での問題解決」のプロセスについて、発達障害者を想定してグループワークを行った。

日 時：平成 31(2019)年 1 月 15 日(火)18:00～19:30

講 師：小川 浩氏(大妻女子大学 人間関係学部教授)

参加者：28 名

2. 受講者アンケートから

各講義の終了後に実施したアンケートによると、全 4 回の平均で、講義は役に立ったかどうかについては、「講義は大変役に立った」が 75.7%、「まあまあ役に立った」が 17.1%と合わせて 92.8%であり大変好評であった。「この講座を何で知りましたか」という質問に対しては、主催者の小川が代表

となっている NPO 法人ジョブコーチ・ネットワークのホームページが 35.7%、チラシが 22.9%、口コミが 20.7%であった。対象者が障害者雇用という専門領域であるため、障害者雇用企業に直接研修情報を届けることの重要性が確認された。

今後、この研修会で取り入れて欲しいテーマに関する質問については、多彩な記述があり、障害者雇用現場で必要とされる専門領域の幅広さと共に、研修参加者の学習意欲の高さを再認識することができた。例示すると以下のような内容である。

＜雇用管理の在り方＞

人事評価制度、人事評価とキャリアアップ、高齢化への対応、合理的配慮、休職や休みがちな人の支援、労働条件の詳細、給与規程、発達障害者に適した職域

＜障害特性理解＞

障害の受容、事例検討(ロールプレイやディスカッション)

＜関係機関との連携＞

企業が支援機関に求めること、医療機関との連携

＜指導技法・評価方法＞

仕事のモジュール化、発達障害者に対する育成方法、研修内容、男女交際についての指導、障害者社員同士の障害特性理解、関わり方の指導法、ケース記録・支援記録の書き方



3. まとめと今後の課題

地域貢献プロジェクトとして昨年度と今年度、企業の障害者雇用担当者向けのセミナーを開催したその結果、平日の業務終了後の時間帯であるにも関わらず、多くの参加者を得ることができた。また、研修内容も非常に好評であった。民間企業にとって、障害者雇用はコンプライアンス、CSR等の観点から非常に重要な領域ではあるが、現場のニーズに即した研修を提供する組織・機関が限られている。アンケートにも、この研修に対する感謝と継続を期待するコメントが多く寄せられていることから、今回のように大学が情報発信の役割を担うことの必要性と意義を確認することができた。今後も、何らかの形で継続していきたい。

ジュニアアスリートのためのスポーツ栄養セミナー

久保 忠行 准教授

(比較文化学部 比較文化学科)

目的と概要

成長期にあるジュニアアスリートにとって食・栄養と身体について知ることは、スポーツを継続していくうえでもきわめて重要な要素である。本プロジェクトでは、公益財団法人東京都サッカー協会と連携し同連盟に所属するサッカーチームの小学生(高学年)のジュニアアスリートと保護者を対象として、スポーツ栄養に関するセミナーを実施した。このセミナーでは、ジュニアアスリートが練習や試合のスケジュールにあわせて、自分自身で食品を選択できる知識と実践力を身につけることで、日々のコンディション管理と成長期のからだづくりに役立てることを目的とする。

またこのセミナーでは、ジュニアアスリートが練習や試合のスケジュールにあわせて、自分自身で食材や食べ物を選択できる知識と実践力を提供し、日々のコンディション管理とパフォーマンスの向上に役立てることも狙いとする。

本プロジェクトでは、比較文化学部がコーディネーター、家政学部がプロジェクト実施主体となり、公益財団法人東京都サッカー協会に所属するチームメンバーとその保護者を対象とした。セミナーは2018年11月24日(土)に千代田キャンパスで実施した。

活動内容

セミナーでは、小清水孝子(家政学部・教授)とゼミ生が主体となって保護者向けのセミナーと小学生(高学年)向けのセミナーが同時進行で行われた。



大人向けのセミナーの様子



小学生向けのセミナーの様子

3年目となる本年度は、「試合にむけた食事」というタイトルで家政学部の小清水孝子教授が保護者向けの講義を実施した。また帝京大学の市川麻美子先生を講師に招き小学生(高学年)を対象としたセミナーを同時開催した。

大人向けのセミナーでは、スポーツ選手の基本の食事の形、試合前調整期、試合前夜、試合当日の食事のポイントやエネルギー量と栄養バランスを計算した弁当箱の詰め方、時間帯に合わせた補食例などについて講義した。また糖質の摂取についても具体的な食品を事例にあげながらレクチャーした。

子ども向けのセミナーでは、アスリートにとっての食事の重要性、主食、主菜、副菜、補食について平易な言葉をもちいて押さえたうえで、「そのまんまお弁当カード」や「そのまんま菓子・飲み物カード」を用いながら、補食と栄養バランスについてのワークを実施した。ワークの実施にあたっては、小清水孝子教授のゼミ生がファシリテーターとなった。

講義後の質疑応答では、参加者が日々、疑問に思っていることについて活発に意見や質問がだされ盛況であった。実施後のアンケートからは、保護者が食事内容について悩んでいる点や疑問点について本セミナーをとおして何らかの解決策や方向性が見出せたことが確認できた。また親がサポートできるのは食事だけと思うので、このようなセミナーがあつて良かったとの声も聞かれた。参加した小学生からは、試合前と後で何を食べれば良いのかがわかったといったコメントがあった。昨年に引き続き、学んだことをチームと共有したいといったコメントも寄せられた。

認知症や精神疾患を抱える人々の地域移行・地域定着を学ぶワークショップ

藏野 ともみ 教授

(人間関係学部 人間福祉学科)

1 はじめに

高齢化が進む現代社会において、認知症や精神疾患を抱える人々と共に暮らす社会を構築することは、多様な人々との共生社会の実現に向けて中核をなすものである。多摩市は全国を代表する高齢化の進んだ都市でもあり、認知症予防や健康増進に力を入れつつも、一方で認知症を抱える人々と家族、あるいはその周りにいる人々の支援を行っていくことも必須であり、それらの支援に携わる者には多岐にわたる知識や多機関との連携が求められる現状にある。また、多摩地域及び神奈川県北部は精神科病院が多く、長期入院の末に高齢になられた方や認知症の重症化により精神科病院で治療を受ける人々の需要に答えている地域でもある。

本プロジェクトは、精神科病院や認知症疾患治療に携わる医療機関、身体合併病棟を持つ医療機関、老人保健施設等で支援を実施している人を対象に、多機関及び対象者の理解に向けたワークショップを行い、また、地域移行・地域定着を促進するためにどのような支援を行うか考える機会とした。

2 プロジェクトの目的

本プロジェクトでは、認知症や精神疾患を抱える人々の地域移行・地域定着に際し、必要な知識や対象者理解のための情報、当事者・家族と多様な機関等をどの様にマネジメントしていくか等について、実践的に学ぶワークショップを行った。ワークショップを通じ、地域包括ケアシステムが導入される時に、中核的な役割を果たす支援者の知識と技術の再学習の機会として、さらに同じ地域の横の繋がりを作ることで、支援システム構築の第一歩とすることを目的とする。

3 活動内容

地域包括ケアシステムの導入が始まり、医療・介護・生活等全て、在宅で行うことが求められている。それらを支える支援者の多くは非医療職であり、中には資格等を持たず知識や実践の拠り所となる倫理についても十分ではない状況にある者も少なくない。その様な現状で、彼らのコーディネートやマネジメント、医療・介護機関、行政とのリンケージを行う役割を社会福祉士や精神保健福祉士に求められてきている。しかし、それぞれ専門化している中で、適切な判断を行っていくためには、多機関の機能を知ること、対象者を支援する上で本当に必要な情報の抽出と共有・活用、支援者として求められる判断の根拠等が不可欠である。

それらの現状を踏まえ、本プロジェクトのワークショップでは、講義を踏まえた上で、事例を用いてグループ検討を行い、ロールプレイ等によって実践的に学ぶ企画を行った。また、重度の認知症や精神疾患を抱える人々の地域定着には、家族等だけでなく地域や周囲の人々の受け入れも重要である。地域啓発に関する取組みについてもワークショップ形式で展開することを盛り込んだ。

平成30年6月からワークショップのファシリテーターやパネリストと打ち合わせを行い、4回に渡る内容の企画及び、参加応募者50名の中から、原則として同じ参加者とし、32名の選定を行った。

また、事例提供者を選定し、企画主旨説明と事例提供の方法についてレクチャーを行った。

(1) 第1回ワークショップ

平成30年9月15日に実施し、「根拠を持って自分の実践を振り返る」というテーマで支援のあり方について講義・演習を行った。具体的には、プロジェクト代表者から、精神障害者や認知症を抱える人々の地域移行・地域定着の現状と課題、及び支援者としてどのような介入を行うか等、全4回のワークショップで必要とする知識について講義し、導入の事例を使ってグループワークを行った。また、その後参加者の交流会を行った。

(2) 第2回ワークショップ

平成30年11月18日に実施し、「プロセスレコードを活用したピアグループスーパービジョン」を行い、7名のファシリテーターのもと、別の4名の参加者の実践を元にグループディスカッションを行った。具体的には、4グループに分かれ、午前・午後の2回グループを変えながら、ピアスーパービジョン形式で、提供された事例のインシデントを使い自らの実践を振り返る機会とした。

(3) 第3回ワークショップ

平成30年12月16日に実施し、「急性期病院・地域包括ケア病棟・精神科病院・在宅支援機関の連携における課題について」5名のパネリストから話題提供を受け、パネルディスカッションとグループワークを実施した。具体的には、急性期病院等、多様な機関実践者をパネリストとし、認知症や精神疾患を抱える人を支えるに当たって他機関との連携に関する課題について問題提起を行った。その後、5グループに分かれ、連携をテーマにしたグループ討議を行った。

(4) 第4回ワークショップ

平成31年1月27日に実施し、「精神科長期入院患者の地域移行・地域定着支援における連携チームの作り方」とし、事例を用いた実践的なロールプレイを行った。具体的には、大卒の地域及び多様な所属機関種別を混在したグループに分け、実践状況を持ち寄りながら、連携チームの作り方についてディスカッションを行った。その後、グループをシャッフルし、連携チームの会議を想定したロールプレイを行った。グループ毎にファシリテーターを置き、これまでのワークショップで議論したことを振り返りながら、多機関が共有したいと思っている情報等について考え、また自分の所属機関に持ち帰る課題について話し合った。



4 まとめ及び今後の課題

今年度は、多摩地域及び本キャンパスに近い神奈川県からの参加者を中心として、情報共有や顔を合わせることができる関係作りを心がけた。全4回演習形式で自らの実践や地域の課題について、実際に連携を取り合う機関の支援者同士で具体的にディスカッションすることもあり、来年度に向けての要望も多く寄せられた。また、自分の職場で本ワークショップで学んだ自らの実践を振り返る演習を持ち帰り、月1回実施している機関もあり、今後も継続的なワークショップを実施していきたいと考える。

東京都少女サッカー大会（小学生）支援プロジェクト

高田 馨里 准教授

（比較文化学部 比較文化学科）

平成30年度も引き続き、12月2日に地域貢献プロジェクトとして東京都少女サッカー大会(小学生)支援プロジェクトを実施した。3年目になる今年度も、多摩市を中心に少女チームから構成されている東京都少年サッカー連盟第16ブロックと協力して「第2回 TOMAS 東京都3年生大会 第16ブロック大会」を開催した。連盟には、備品管理や会場設営を連盟にお願いしており、滞りなく開催することができた。多摩地区を中心に東京都全域から16の少女サッカーチームが参加し、選手、指導者、保護者など総勢600人を数える来校者があった。試合は4つのブロックに分けられ、各ブロックで3試合ずつが行われ、上位4チームが決勝リーグに進むことになった。

今年度は、比較文化学部の学生たちとともに、大妻女子大学バトンサークルの学生がボランティアとして参加した。学生ボランティアは少女サッカーチームの誘導、さらには試合前のユニフォームチェックなど、審判員を補助する重要な役割も担った。バトンサークルのメンバーは、日ごろの練習の成果を発揮して、お昼休みの時間帯に選手応援のための演技を行い、選手やご家族から大きな声援を送られた。とくにディズニーメドレーの演技に少女選手たちは大歓声を送ってくれた。



ひろびろとした人工芝グラウンドで選手たちはのびのびとプレーを行った。これはコーナーキックシーンである。



寒さをものともしない白熱したゲームが行われた

大妻女子大学多摩キャンパスの全学共用グラウンドの設備について選手たちの評判は極めてよく、「思いっきり走れる」、「転んでも大丈夫」、「またここで試合がしたい」など、うれしい感想が寄せられた。将来の日本女子サッカー選手の育成をお手伝いし、未来のなでしこを応援するプロジェクトとして、引き続き東京都少年サッカー連盟第16ブロックと連携して、試合運営を継続していきたい。



審判・技術指導員の講評を聞く少女選手たち

「だし」で育む和食のみらい推進プロジェクト2

富永 暁子 准教授

(短期大学部 家政科 食物栄養専攻)

1. プロジェクトの目的

現在世界で和食が注目されている。和食は栄養価が高く、素材の味や季節も大切にしており、健康食という一面も持っているからである。一方で、日本国内に目を向けると、食の欧米化が進み、和食を食べる頻度や、作る機会も減っているのが現状である。和食の最大の特徴は、旨味であり、「だし」によって旨味を感じることができる。「だし」の材料は自然の素材であるため、美味しさと健康を両立できるのである。

しかし、「だし」をとるということは一般的に難しい、時間がかかる、面倒というイメージを持つ人が多く、「だし」をとる人は少なくなっている。

そこで本プロジェクトでは、誰でも簡単に「だし」をとることができる、頑張らなくても続けられる美味しい「だし」のとり方、活用法も伝え、我が日本人が世界に誇るべき和食を再評価する機会を創出することを目的とした。昨年は講師を招き、デモンストレーション形式での開催だったが、実習形式でも学びたいという声が多数あったため、今年度は実習形式での講座も行い、自宅で実践するきっかけを作ると同時に参加者のコミュニケーションを図る場所を提供し、地域の活性化に取り組むことに目視した。

2. プロジェクトのスケジュール

- 10月 講師と打ち合わせ・広報及び申し込み開始(地域内掲示版、講師のHP等)
スタッフ打ち合わせ・イベント準備・行事保険に加入
- 11月 3日 第1回「おだし教室」開催
- 11月 24日 第2回「おだし教室」開催
- 12月 アンケートの集計、反省会、会計報告作成
- 4月 年次報告書提出

第1回「おだし教室」11/3の様子



講義の様子

準備の様子

試食メニュー

第2回「おだし教室」11/24の様子



学生スタッフ

実習全体

実習献立

3.「おだし教室」の概要

講師：上田江美子氏(福岡県海産物問屋「博多三徳」の三代目、11月3日のみ)

スタッフ：プロジェクト代表教員及び本学学生ボランティア 各回4～5名

実施日時：11月3日(土祝)、11月24日(土) 11時～13時半

実施場所：本学F棟5階 多目的調理室

参加人数：**11月3日** 29名(欠席5名)

内訳 男6人 女16人 (未回答7人)

年代 70代2人、60代3人、50代4人、40代11人、30代7人、20代2人

11月24日 22名(欠席6名)

内訳 男1人 女21人 (未回答2人)

年代 60代1人、50代3人、40代8人、30代5人、20代2人、20歳未満1人

*両日ともに募集1週間で定員(30人)になり、キャンセル待ちが出て、次回開催日程の問い合わせがあった。

実施内容：1回目は、だし素材の選び方や保存法、簡単なだしのとり方とだしを使った料理のデモンストラーションの後に、紹介した料理11品の試食を実施した。

2回目は、1回目で学んだことを振り返りながら、アンケート結果を参考にし、自宅でも簡単に作りやすい献立(4品)を班ごとに実習形式で調理し、試食した。

実施献立：**11月3日** 鶏団子スープ、いなり寿司、ひじき煮、ひじきサラダ、魚の南蛮漬け、かぼちゃとがんもの煮物、いりこの佃煮、春雨サラダ、かぶの生姜煮、酢の物、みそ汁

11月24日 鯖のおろし煮、春雨サラダ、いりこの佃煮、玉ねぎのみそ汁

【参加者の意見】

「品数が多く大変満足で、調味料の話も聞けて良かった」「千代田区で働いて23年、いい大学が近くあって娘の進学先にも進めたいです」「講義内容がとても良かった。来年子どもが生まれるので実践していきたいです」「昨年も参加し、だしをとり続けて1年が経ちました。料理の味が醤油だけで限界だったので世界が広まりました」「久しぶりの母校での講習会は楽しかったし、勉強になった」

「今までの人生で食が適当で中食とか多くて子供が生まれてちゃんとしようと思っても難しく困っています。料理がめっちゃくちゃ美味しかった」「子連れOKでありがたかった」「また企画してくださいHPチェックして申し込みます」「栄養や健康についてテレビなどで色々な情報が飛び交っていますが、きちんと正しい知識を学んでみたいです」「同じテーブルの方と地域情報を交換出来てありがたかったです」「2回とも大変勉強になりました。1回目で習ったことを家で実践し、上手くいかなかった部分も実習班の方々と相談しあえたり、学生さんにコツを聞いて理解を深めることができました」

など、たくさんのご意見をいただきました。

【総括】

昨年同様、各回とも定員を上回る申し込みで、キャンセル待ちが出たことから、千代田区在住、在勤の方々に関心のあるテーマであったと考えられる。今年度は実習形式も取り入れて2回に分けて開催したので、参加者の理解を深め、家庭で継続的にだしをとるきっかけ作りができたと思われる。また、卒業生の参加や地域の方々との交流はボランティア学生にとっても良い刺激となり、学んだことは多い。今後もこのようなイベントを通して地域の方々へ貢献していきたいと思う。

大妻力を世羅町の第6次産業支援につなげる地域貢献活動の試み

堀口 美恵子 教授

(短期大学部 家政科 食物栄養専攻)

【目的】

「大妻力」をキーワードとする本プロジェクトの目的は、様々な学部の卒業生(食物系、児童系、被服系、文系；昭和46年度～平成29年度卒)、食物系教員、及び、フードスペシャリスト、家庭科教諭、栄養教諭、管理栄養士、栄養士を目指す学生が連携し、大妻での学びや各専門領域から創出される成果を、世羅町の6次産業支援つなげる地域貢献活動に活かすことである。さらに学生のユニークな発想力を活かした「レシピ開発」や「イベント運営」の多世代に対する主体的な活動により、学生のコミュニケーション能力や学習意欲の向上、キャリアデザインや関係的自立の体得につなげることも目的とした。

【方法】

食を通じた幸福感や快適な生活環境は生活に潤いを与え心身の健康力を向上させるという観点から、代表者が取り組んできた食育&花育&復興支援をさらに発展させる地域貢献活動を行った。具体的には、世羅町を視察後、生活環境を豊かにし心身の健康力向上に役立つイベント(癒しのクラフト作り、ヘルシーおやつコンテスト等)を、世羅町の特産品を活用して実施した。なお、世羅町や特産品の特徴、6次産業支援に関する取り組みについては、全てのイベントで紹介した。

【結果】

8月23日(木)から25日(土)に世羅茶再生部会の方々と、コタカ先生の生家、及び、6次産業ネットワーク事務局、世羅茶の畑と工場、世羅道の駅、甲山いきいき村、世羅ワイナリー、世羅きのご園、世羅幸水園、世羅大豊農園、世良ゆり園、世羅農園、世羅町森林組合(コタカ先生が技芸塾を開いていた場所)を訪ね、6次産業支援に関する打ち合わせ等を行った。9月13日には、本学調理室において特産食材を用いた調理試作を行い、管理栄養士の資格を持つ食物系教員と卒業生(合計8名)による評価を受けた。この評価を参考に、下記イベント(3)、5))の内容を再検討した。

1) 第6回 MIW 祭り(10月6日(土)；千代田区役所)

千代田区男女共同参画センターより、女子教育に貢献したコタカ先生の紹介を含めた地域交流ブースへの参加依頼を受け、創立110周年の本学と世羅町の紹介、及び、世羅町のドライフラワーを用いたハーバリウム作りと世羅茶4種の飲み比べ体験を行った。いずれも開始前から希望者が並ぶほど好評であり、本学と世羅町に興味と関心を持って頂くことができた。

2) 大妻祭(10月27日(土)；本学教室)

世羅町の特産品について、クラフト作り(アロマワックス、染色ステンシルティーマット)と展示(ドライフラワー、生鮮食品、加工食品、世羅茶、木工品)、及び、世羅茶再生に取り組む地元の活動等について紹介し、6次産業支援に関する共感を得ることができた。また、平成24年から行っている東日本大震災復興支援についても紹介し、継続的な地域貢献活動の必要性について理解を深めて頂くことができた。その他、作成した食育媒体の体験コーナーを設け、食の大切さを伝えることができた。

3) 大人のヘルシーおやつコンテスト(11月10日(土)；本学調理室)

「世羅食材を活用するヘルシーおやつ」を食物系学生(食栄1・2年、食専3年)が考案し、1次審査を通過した11品について、近隣の大人らによる最終審査を行った(プレゼンテーションと味・見た目・アイデアによる評価)。また、卒業生による「ヘルシーおやつのミニ講座」、卒業生考案おやつ(おからのスイートポテト、世羅食材のお焼3種)と世羅茶の提供、世羅食材の紹介も行った。世羅町ふるさとPR大使も参加下さり、世羅町賞を学生に授与、講評して下さいました。本コンテストを通じ、おやつと食事、健康管理に関する知識を区民に伝えると共に、世羅町の食材や世羅茶再生についても関心を持って頂くことができました。

4) エコ&サイクルフェア(12月1日(土)；千代田区役所)

千代田エコシステムより「エコ&サイクルフェア 2018～千代田のエコ自慢～」への参加依頼がありブースを設けた(本イベントには3年連続で参加し、食育ボランティアグループ「ぴーち」が行っている「食から広がるエコなクラフト作り」を紹介している)。本年は、樹木の香りの染色コサージュ(世羅町の間伐材(檜・ひば)の木くずを食材廃棄部分(玉ねぎ・りんご・みかんの皮など)で染色した布で包んで仕上げる)と世羅町ドライフラワーのミニブーケ(ドライフラワーをリサイクル禁止の米紙袋で包み、染色糸糸で結わく)の体験コーナーを設けた。本イベントにより、エコを通じた世羅町6次産業支援について、理解を深めて頂くことができました。

5) そば打ち体験交流会(1月12日(土)；四番町児童館調理室)

千代田区のそば打ちボランティアグループ「そばちよ」とのコラボ活動として、本学学生、卒業生、海苔で健康推進委員会の山上氏、区民の参加者で、そば打ち体験交流会を行った。「そばちよ」からそば打ちを教わる一方、本学スタッフは世羅町食材やおからを用いるヘルシーなおかず、デザート、世羅茶を提供した。なお、提供したヘルシーメニューについては解説をした他、世羅茶再生や間伐材利用の取組等、本プロジェクトの意義についても伝えた(檜のコースターをお土産とした)。また、山上氏による花巻そば(香りのよい海苔を汁に溶かして食する温かいそば)の実践を行い、それぞれ活発な質疑応答があった。本交流会により他団体と学生らのコミュニケーションが図れたこと、和食文化、国産食材、健康に関する知識を共有することができたこと、世羅町の6次産業支援について関心を持って頂くことができたことから、本イベントは地域連携活動としても意義深いものであった。

6) 大妻さくらフェスティバル 2019(3月23日(土)；本学アトリウム)

「癒しのクラフト作り&復興支援：春色の作品を作ってみよう」という体験コーナーを設け、世羅町のドライフラワーやリボン状の間伐材を用いたミニブーケと樹木の香りの染色コサージュ、三陸の和ぐるみを用いたカスタネット、及び、桜模様の石鹸カービングを多世代の方々に制作して頂いた。また、世羅町特産の大豆をテーマに作成した食育パネルシアターを公演し、大変好評であった。

【考察】

世羅町の6次産業支援を目的として行った上記の各種イベントは、五感を快適に刺激する内容でもあるため、参加した千代田区民の方々の心身の健康力向上に寄与することができたものと思われる。さらに、教員や様々な卒業生と連携して学生が主体的に行った活動は、学生の学習意欲向上やキャリアデザインにつながることを期待された。なお、千代田キャンパスの施設を活用して行った本プロジェクトは、総合大学としての人材と物の両面をアピールできる本学全体の広報の一環ともなり、110周年を迎えた本学に受け継がれる理念を大妻力として伝える有効な地域貢献活動であった。

大妻さくらフェスティバル 2019

日時：平成 31 年 3 月 23 日(土) 10:00～15:00

会場：千代田校大学校舎地下 1 階 アトリウム、講堂控室、ラウンジりょうま

アトリウムステージプログラム

会場：大学校舎地下 1 階アトリウム 来場者： 約 850 名

時間	演 目	出演者
10:00	開 会	
10:00	投げ合い・素囃子 ビッグ・バンド演奏	九段小学校 九段囃子の会 九段小学校 九段 Planets
10:50	理事長挨拶	大妻学院理事長 伊藤 正直
10:55	来賓挨拶	千代田区長 石川 雅己
11:00	舞台撤収・設営	
11:10	コーラス	大妻中学高等学校 コーラス部(高校)
11:30	日本舞踊	大妻中学高等学校 日本舞踊部
11:50	競技ダンス	法政大学・大妻女子大学 舞踏研究部
12:10	休憩	
12:20	千代田学事業報告 ポスターセッション	
13:00	和太鼓演奏	駐日英国大使館太鼓会 どん BRI
13:20	舞台撤収・設営	
13:30	チアリーディング演技	大妻女子大学 オールチアリーディング・カンパニーLYNX
13:50	アカペラ	二松学舎大学 アカペラサークル Voice of Nation
14:10	フラダンス	大妻女子大学 OG Mauhana Hula Studio
14:30	バトントワリング演技	大妻中学高等学校 バトントワリング部
14:50	実行委員長挨拶	大妻さくらフェスティバル実行委員長 地域連携推進センター所長 井上美沙子
15:00	閉 会	

平成 30 年度地域連携プロジェクト報告会プログラム

会場：大学校舎地下 1 階 ラウンジりょうま

参加者：延べ 444 名(発表者含む)

時 間	代表者	所 属	プロジェクト名
10:00~10:20	深水 浩司	教職総合支援 センター	神保町の出版と書店を元気にするプロジェクト
10:20~10:40	八城 薫	人間関係学部	からきだ匠(たくみ)カフェ~地域がつながる場所~
10:40~11:00	川之上 豊	家政学部	坂の上の街を囲碁で盛り上げる
11:00~11:20	炭谷 晃男	社会情報学部	どろん子大運動会と寺子屋活動
11:20~11:40	石井 雅幸	家政学部	三番町アダプトフラワーロードの会との地域美化運動
11:40~12:00	山本真知子	人間関係学部	里親・ファミリーホームの子ども支援プロジェクト
12:00~12:20	甲野 毅	家政学部	千代田&多摩地域 子供自然体験教育プロジェクト
12:20~12:40	細谷 夏実	社会情報学部	能登の里海を守る：伝統魚と地域の活性化プロジェクト
12:40~13:00	加藤 悦雄	家政学部	親子の居場所づくりに向けた「大泉子ども食堂」プロジェクト
13:00~13:20	藏野ともみ	人間関係学部	誰もが子ども見守り隊プロジェクト ー子どもも大人も誰かが不自由だと思ふことを知るために、私たちの「伝える」取組みー
13:20~13:40	松田 晃一	社会情報学部	地域の子どもたちが体を動かして仲間と遊べるロボット中心の遊び環境づくり支援
13:40~14:00	堀 洋元	人間関係学部	唐木田発：学生と地域でコラボする体験型防災講座
14:00~14:20	松本 暢子	社会情報学部	多摩における子育て家族の居住・住み替え支援プロジェクト
14:20~14:40	高波 嘉一	家政学部	大学近隣店舗と学生とのコラボレーションによる「健康×ボランティア」プロジェクト
14:40~15:00	小川 浩	人間関係学部	障害者雇用企業との連携による T ボール大会の開催
15:00~15:20	田中 直子	家政学部	むささび食堂：食事で心の共生を

俳句大賞発表

応募期間：平成 30 年 12 月 5 日(水)~平成 31 年 1 月 10 日(木)17:00 まで

応募部門：小学生以下の部、中学・高校生の部、一般の部

応募テーマ：春祭、海

応募総数：526 名 1,217 句 (春祭 574 句 海 638 句)

<小学生以下の部> 応募人数 25 名 68 句 (春祭 44 句、海 22 句)

<中学・高校生の部> 応募人数 281 名 568 句 (春祭 225 句、海 343 句)

<一般の部> 応募人数 220 名 581 句 (春祭 305 句、海 273 句)

※部門ごとの()内の句数は、審査対象外の句を除いています。

賞：理事長・学長賞(賞状、図書カード 5 千円) 全テーマ、全部門から 6 名(計 5 名)

優 秀 賞(賞状、図書カード 3 千円) 各テーマ、各部門から 3 名(計 18 名)

神輿展示

千代田区三番町町会、靖國神社の協力により、毎年夏、靖國神社で行われる「みたままつり」で本学学生が担ぐ神輿や法被等を展示〔平成31年3月8日(金)から平成31年4月5日(金)まで本館1階入口付近に展示〕。



展示みこし

除伐材から作った炭でクラフト(消臭袋)作り体験

地域連携プロジェクト採択、家政学部ライフデザイン学科甲野毅准教授と環境教育学ゼミ生による体験コーナーを設置。ゼミ生が妙高高原の天然林で除伐をし、専門家指導の下その除伐材から作成した炭を、きれいなメッシュの巾着袋に入れて消臭袋を作成する来場者参加型体験コーナー。手作りパネルも展示し、プロジェクトの活動内容を分かりやすく紹介。

場所：大学校舎地下1階講堂控室

癒しのクラフト作り&三陸復興支援(春色の作品を作ってみよう)のワークショップ

地域貢献プロジェクト採択、短期大学部家政科堀口美恵子教授が代表を務めるプロジェクトの第6回目のイベントとして、堀口美恵子教授と卒業生講師及びプロジェクト構成員の学生により、コタカ先生の故郷である広島県世羅町のドライフラワーやヒノキなどのリボン状の間伐材を用いたミニブーケ、桜の花びらや食物の色素で染色した布や毛糸を用いた樹木の香りのコサージュや、三陸和ぐるみを用いたカスタネット、桜模様の石鹸カービングを作る来場者参加型体験コーナーの設置。世羅町特産の大豆をテーマに作成した食育パネルシアターを公演。イベントの作品(石鹸カービング、ティーマット、ハーバリウム)や卒業生の作品(米紙袋作品、和ぐるみ作品)なども展示。

場所：大学校舎地下1階アトリウム

ねりきり販売

大妻サポート購買部による、本学校章をかたどった「紅白ねりきり」の販売。

場所：大学校舎地下1階大妻サポート購買部



紅白ねりきり

業務報告

平成 30 年度の事業

1. 地域連携プロジェクト

大妻女子大学では、教職員・学生によって様々な地域連携活動が行われています。教職員のグループ又は教職員と学生のグループによる、学生の主体性や自立心が身に付く地域連携活動の一層の推進・発展を図ることを目的に、その活動経費を補助する「地域連携プロジェクト」が平成 25 年度から始まりました。

平成 30 年度は 19 件の申請中 16 件が採択され、大妻さくらフェスティバル 2019 で報告会が行われました。

応募受付	平成 30 年 5 月 10 日(木)～平成 30 年 6 月 4 日(月)13:00
選考結果通知	平成 30 年 6 月 8 日(金)
授与式、事務説明会	平成 30 年 6 月 16 日(土)
プロジェクト支援	平成 30 年 5 月 10 日(木)～平成 31 年 3 月 31 日(日)
プロジェクト報告会	平成 31 年 3 月 23 日(土) (大妻さくらフェスティバル 2019)
実施報告書提出締切	平成 31 年 4 月 6 日(土)

2. 地域貢献プロジェクト

大妻女子大学では、様々な地域貢献活動が行われています。広く地域のみなさまへ本学の教育と研究成果を還元し、みなさまの多様な学習ニーズに応えるとともに、地域社会の教育、学術、文化の発展に貢献する活動の推進を図ることを目的に、その活動経費を補助する「地域貢献プロジェクト」が平成 26 年度から始まりました。

平成 30 年度は 7 件の申請中 7 件が採択されました。

応募受付	平成 30 年 5 月 10 日(木)～平成 30 年 6 月 4 日(月)13:00
選考結果通知	平成 30 年 6 月 8 日(金)
授与式、事務説明会	平成 30 年 6 月 16 日(土)
プロジェクト支援	平成 30 年 5 月 10 日(木)～平成 31 年 3 月 31 日(日)
実施報告書提出締切	平成 31 年 4 月 6 日(土)

3. ホームページ開設

地域連携推進センターのホームページは、平成 25 年 6 月の運営委員会及び企画実行委員会で原案を提示して承認を得た後、同年 8 月から学内でコンテンツの制作を開始し、同年 11 月に一般公開し随時更新しています。

なお、ホームページは業者に委託せず、当センターで更新・運用しています。

4. 平成 30 年度 地域住民向け講座等

①平成 30 年 5 月 26 日(土) 13:00～16:30

「外国人おもてなし語学ボランティア」育成講座

担当講師 1 名 参加者 35 名

②平成 30 年 7 月 11 日(水) 13:30～15:30

平成 30 年 7 月 12 日(木) 17:30～19:30

平成 30 年 7 月 13 日(金) 10:00～12:00

浴衣着付け講座；みたままつりに浴衣で行こう

担当教員 1 名 参加者 14 名(地域の方 6 名、学生 8 名)

③平成 30 年 8 月 7 日(火) 10:00～15:00

夏休みプログラミング教室&理科実験(多摩校)

担当教員 3 名 協力学生 7 名 参加者 36 名(小学生 32 名、保護者 4 名)

④平成 30 年 8 月 12 日(日) 10:00～15:00

☆夏休み 小学生企画 第 1 弾☆理科実験教室(千代田校)

担当教員 2 名 協力学生 9 名 参加者 42 名(小学生 41 名、保護者 1 名)

⑤平成 30 年 8 月 22 日(水) 10:00～15:00

☆夏休み 小学生企画 第 2 弾☆プログラミングワークショップ&自由研究&工作教室(千代田校)

担当教員 3 名 協力学生 14 名 参加者 39 名(小学生 35 名、保護者 4 名)

⑥平成 30 年 9 月 8 日(土) 13:00～15:00

大妻みちあそび

担当教員 2 名 協力学生 6 名 参加者 50 名(子ども 30 名、保護者 20 名)

⑦平成 30 年 12 月 1 日(土) 14:30～16:30

初めてのスマホ教室

担当教員 1 名 協力学生 5 名 参加者 9 名

⑧平成 30 年 12 月 8 日(土) 13:00～15:00

暮らしの中の書道

担当講師 1 名 助手 1 名 参加者 9 名

5. 平成 30 年度 地域との交流事業

(1)地域の方との懇談会

平成 30 年 6 月 16 日(土) 15:00～16:30

G 棟 3 階アクティブラウンジ

教職員 12 名、近隣町会・商店街振興組合役員及び千代田区職員の方等約 20 名

(2)アダプト事業 (千代田キャンパス近隣花植活動)

①平成 30 年 6 月 16 日(土)、11 月 6 日(火)

大学周辺歩道内の花植枡へ地域住民と一緒に花植えを実施

学生・大学教職員約 130 名、地域住民・近隣企業及び千代田区職員の方等約 20 名(両日)

九段小学校児童約 400 名(11 月のみ)

②平成 30 年 7 月 10 日(火)、11 月 5 日(月)

中高周辺歩道内の花植耕へ中高生徒と一緒に花植えを実施
教職員 5 名、中学生徒約 20 名(両日)

(3)チャリティコンサート

会場：大妻講堂

平成 30 年 11 月 17 日(土) 17:00～18:30

学校法人大妻学院創立 110 周年記念オルガンコンサート

来場者約 550 名 募金 240,119 円

(4)お祭り参加

①平成 30 年 6 月 9 日(土) 14:00～20:00

山王祭に参加

三番町町会の一員として、神輿を担ぐこと、山車を引くことに協力。近隣町会の方々と一緒に紀尾井町の清水谷公園から赤坂の日枝神社境内までを練り歩き、御神輿を奉納。

学生約 20 名、教職員 8 名、三番町町会の方等約 50 名

②平成 30 年 7 月 16 日(月・祝)

靖國神社みたままつりに参加

神輿を担ぎ境内を練り歩き、奉納。

学生約 100 名、教職員 6 名、三番町町会の方等約 10 名

(5)千代田区内一斉打ち水参加

平成 30 年 8 月 1 日(水) 16:30～17:00

千代田区主催 千代田区役所本庁舎前オープニングセレモニーに参加

家政学部被服学科の協力を得て、ライフデザイン学科の学生が浴衣姿で打ち水を実施

学生 14 名、教職員 3 名、千代田区長はじめ千代田区職員、近隣大学、地域住民・企業の方等

6. その他

(1)広報用冊子作成(大妻タイムズ No.3、No.4)

本学の地域連携活動の周知を目的に、毎年 6 月と 12 月の年 2 回各 2,000 部発行。

(2)千代田区キャンパスコンソ

大妻女子大学、共立女子大学、東京家政学院大学、二松学舎大学、法政大学の 5 大学が平成 30 年 4 月 1 日付けで包括協定を締結し活動を行っている「千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム」(以下、「千代田区キャンパスコンソ」と表記)の担当として、月 1 回の運営委員会に出席。平成 30 年度は、夏休み中の共同公開講座や千代田区キャンパスコンソ開設シンポジウム等を実施。

※千代田区キャンパスコンソは、平成 30 年度私立大学等改革総合支援事業のタイプ 5(スタートアップ型)に申請し、採択された。

(3)市区町村、企業との連携協定締結窓口として機能。

平成 30 年度締結

- ・石川県穴水町
- ・東京ステーションホテル
- ・文化放送
- ・JTB 教育第二事業部
- ・JAL スカイ

など。

平成 30 年度の予算・決算報告

単位：円

費 目	予 算(A)	決 算(B)	差額(A-B)
地域連携プロジェクト費	3,000,000	2,229,787	770,213
HP運営費	515,000	389,572	125,428
事業運営費	5,300,000	3,220,840	2,079,160
さくらフェスティバル	(1,500,000)	(1,461,024)	(38,976)
地域貢献プロジェクト	(1,000,000)	(793,096)	(206,904)
センター自主企画等	(1,800,000)	(919,406)	(880,594)
公開講座等	(1,000,000)	(47,314)	(952,686)
センター事務経費	800,000	541,225	258,775
合 計	9,615,000	6,381,424	3,233,576

平成 30 年度の会議

地域連携推進センター運営委員会

- 第 1 回 平成 30 年 5 月 9 日(水)
- 第 2 回 平成 30 年 9 月 28 日(金)(文書協議)
- 第 3 回 平成 30 年 10 月 18 日(木)(文書協議)

地域連携推進センター企画実行委員会

- 第 1 回 平成 30 年 5 月 7 日(月)
- 第 2 回 平成 30 年 9 月 25 日(火)(文書協議)
- 第 3 回 平成 30 年 11 月 9 日(金)(文書協議)

大妻さくらフェスティバル 2019 実行委員会

- 第 1 回 平成 30 年 11 月 21 日(水)

大妻女子大学地域連携推進センター規程

平成 25 年 3 月 27 日
制定

(趣旨)

第 1 条 この規程は、本学における地域連携・社会貢献等(以下「地域連携」という。)推進の中核的組織としての機能を果たすことを目的とし、大妻女子大学学則(昭和 48 年 4 月 1 日制定)第 39 条第 3 項及び大妻女子大学短期大学部学則(昭和 49 年 4 月 1 日制定)第 39 条第 2 項の規定に基づき、大妻女子大学地域連携推進センター(以下「センター」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(業務)

第 2 条 センターは、次の各号に掲げる業務を行う。

(1) 産学官連携に関する業務

- ・ 地域連携にかかる活動や事業の情報発信に関する業務
- ・ 地域連携のためのプロジェクト事業等に関する業務
- ・ 社会(市民、企業、行政等)のニーズと大学の持つ機能のマッチング支援に関する業務

(2) 卒業生及び同窓会との連携に関する業務

(3) 中学・高校・大学との連携に関する業務

(4) 公開講座に関する業務

(5) 地域連携推進センターの分掌に係る会議に関する業務

(6) 前各号に掲げる業務の他、地域連携に関する業務

2 前項の業務を行うための事務は、センターが行う。

(組織)

第 3 条 センターに次の教職員を置く。

(1) センター所長

(2) センター事務部長

(3) センター事務課長

(4) センター事務職員 若干名

2 センター業務に関して、その共同推進、学内の横断的連携推進等を図るために、必要に応じて、併任教員を置くことができる。

3 センター併任教員は、学長が委嘱する。任期は 2 年とし、再任を妨げない。

4 センター所長は、本学専任教員の中から学長が任命する。任期は 2 年とする。ただし、再任を妨げない。

5 センター所長は、センターの業務を掌理する。また、所長に事故あるときは、所長があらかじめ指名した者がその職務を代行する。

(運営委員会及び企画実行委員会)

第 4 条 センターに、センターの運営その他の重要事項を審議するため、センター運営委員会を置く。

2 第2条に掲げる業務の企画実行を行うため、センター運営委員会の下にセンター企画実行委員会を置く。

3 センター運営委員会及びセンター企画実行委員会の規程は、別に定める。

(運営細則)

第5条 この規程に定めるもののほか、センターの管理・運営について必要な事項は、運営細則として別に定める。

(規程の改廃)

第6条 この規程の改廃は、センター運営委員会の議を経て、大学運営会議において定める。

附 則

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成25年6月25日から施行し、平成25年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成27年5月26日から施行し、平成27年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成29年6月6日から施行し、平成28年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成30年5月9日から施行し、平成30年4月1日から適用する。

大妻女子大学地域連携推進センター運営委員会規程

平成 25 年 3 月 27 日

制定

(趣旨)

第 1 条 この規程は、大妻女子大学地域連携推進センター規程(平成 25 年 3 月 27 日制定)第 4 条第 1 項の規定に基づき設置される、大妻女子大学地域連携推進センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(所掌事項)

第 2 条 運営委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 大妻女子大学地域連携推進センター(以下「センター」という。)の運営の方針等に関する事項
- (2) センター規程及びセンター運営委員会規程等の改廃に関する事項
- (3) センターの運営に関する予算及び決算等に関する事項
- (4) その他センターの運営に関する必要な事項

(組織)

第 3 条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター所長
 - (2) センター事務部長
 - (3) センター事務課長
 - (4) 家政学部長、文学部長、社会情報学部長、人間関係学部長、比較文化学部長及び短期大学部長
 - (5) 人間文化研究科長
 - (6) 事務局長
 - (7) その他学長の委嘱する者 若干名
- 2 前項第 7 号の委員の任期は、1 年とする。ただし、再任を妨げない。
- 3 学長、副学長及び事務局各部長は運営委員会に出席し、意見を述べることができる。

(委員長)

第 4 条 運営委員会に委員長を置き、所長をもってこれに充てる。

- 2 委員長は運営委員会を代表し、その職務を掌理する。
- 3 委員長に事故あるときは、委員長があらかじめ指名した者がその職務を代行する。

(会議)

第 5 条 委員長は、原則として運営委員会を年 2 回招集し、その議長となる。

- 2 運営委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。
- 3 議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- 4 運営委員会は、委員長が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴取することができる。
- 5 運営委員会は、委員長が必要と認めるときは、臨時に開催することができる。
- 6 運営委員会は、委員長が認めるときは、文書協議をもってそれに代えることができる。

(庶務)

第 6 条 運営委員会の庶務は、センターが行う。

(補足)

第 7 条 この規程に定めるもののほか、運営委員会の運営に関して必要な事項は、運営委員会において定める。

(規程の改廃)

第 8 条 この規程の改廃は、運営委員会において定める。

附 則

この規程は、平成 25 年 4 月 1 日から施行する。

大妻女子大学地域連携推進センター企画実行委員会規程

平成 25 年 3 月 27 日
制定

(趣旨)

第 1 条 この規程は、大妻女子大学地域連携推進センター規程(平成 25 年 3 月 27 日制定)第 4 条第 2 項の規定に基づき設置される、大妻女子大学地域連携推進センター企画実行委員会(以下「企画実行委員会」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(所掌事項)

第 2 条 企画実行委員会は、大妻女子大学地域連携推進センター(以下「センター」という。)の運営方針に基づき、次の各号に掲げる事項について審議する。

(1) 産学官連携に関する事項

- ・ 地域連携にかかる活動や事業の情報発信に関する事項
- ・ 地域連携のためのプロジェクト事業等の企画・実行に関する事項
- ・ 社会(市民、企業、行政等)のニーズと大学の持つ機能のマッチング支援に関する事項

(2) 卒業生及び同窓会との連携に関する事項

(3) 中学・高校・大学との連携に関する事項

(4) 公開講座に関する事項

(5) 地域連携推進センターの分掌に係る会議に関する事項

(6) 企画実行委員会規程等の改廃に関する事項

(7) その他センターの企画・実行に関し必要な事項

(組織)

第 3 条 企画実行委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

(1) センター所長

(2) センター事務部長

(3) センター事務課長

(4) センター事務職員から 1 名

(5) センター併任教員

(6) 家政学部、文学部、社会情報学部、人間関係学部、比較文化学部、短期大学部及び人間文化研究科から選ばれた専任教員(各学部 1 名、人間文化研究科 1 名)

(7) 学長の委嘱する専任教員 若干名

(8) その他事務局長の委嘱する者 若干名

2 前項第 6 号、第 7 号及び第 8 号の委員の任期は、1 年とする。ただし、再任を妨げない。

3 前項第 6 号及び第 8 号の委員は、併任教員が兼務することができる。

(委員長)

第 4 条 企画実行委員会に委員長を置き、所長をもってこれに充てる。

2 委員長は企画実行委員会を代表し、その職務を掌理する。

3 委員長に事故あるときは、委員長があらかじめ指名した委員がその職務を代行する。

(会議)

第 5 条 委員長は、必要に応じて委員会を招集し、その議長となる。

- 2 企画実行委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。
- 3 議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- 4 企画実行委員会は、委員長が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴取することができる。
- 5 企画実行委員会で企画した事業等は、必要に応じ、大妻女子大学地域連携推進センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）の承認を得るものとする。

（庶務）

第6条 企画実行委員会の庶務は、センターが行う。

（補足）

第7条 この規程に定めるもののほか、企画実行委員会の運営に関して必要な事項は、企画実行委員会において定める。

（規程の改廃）

第8条 この規程の改廃は、企画実行委員会の議を経て、運営委員会において定める。

附 則

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成27年5月26日から施行し、平成27年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成29年6月6日から施行し、平成28年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成30年5月9日から施行し、平成30年4月1日から適用する。

大妻女子大学 地域連携推進センター
平成 30 年度年報 第 6 号

2019 年 10 月発行

大妻女子大学 地域連携推進センター
〒102-8357 東京都千代田区三番町 12 番地
TEL (03)5275-6877
URL <http://www.chiiki.otsuma.ac.jp/>
E-mail chiiki@ml.otsuma.ac.jp

